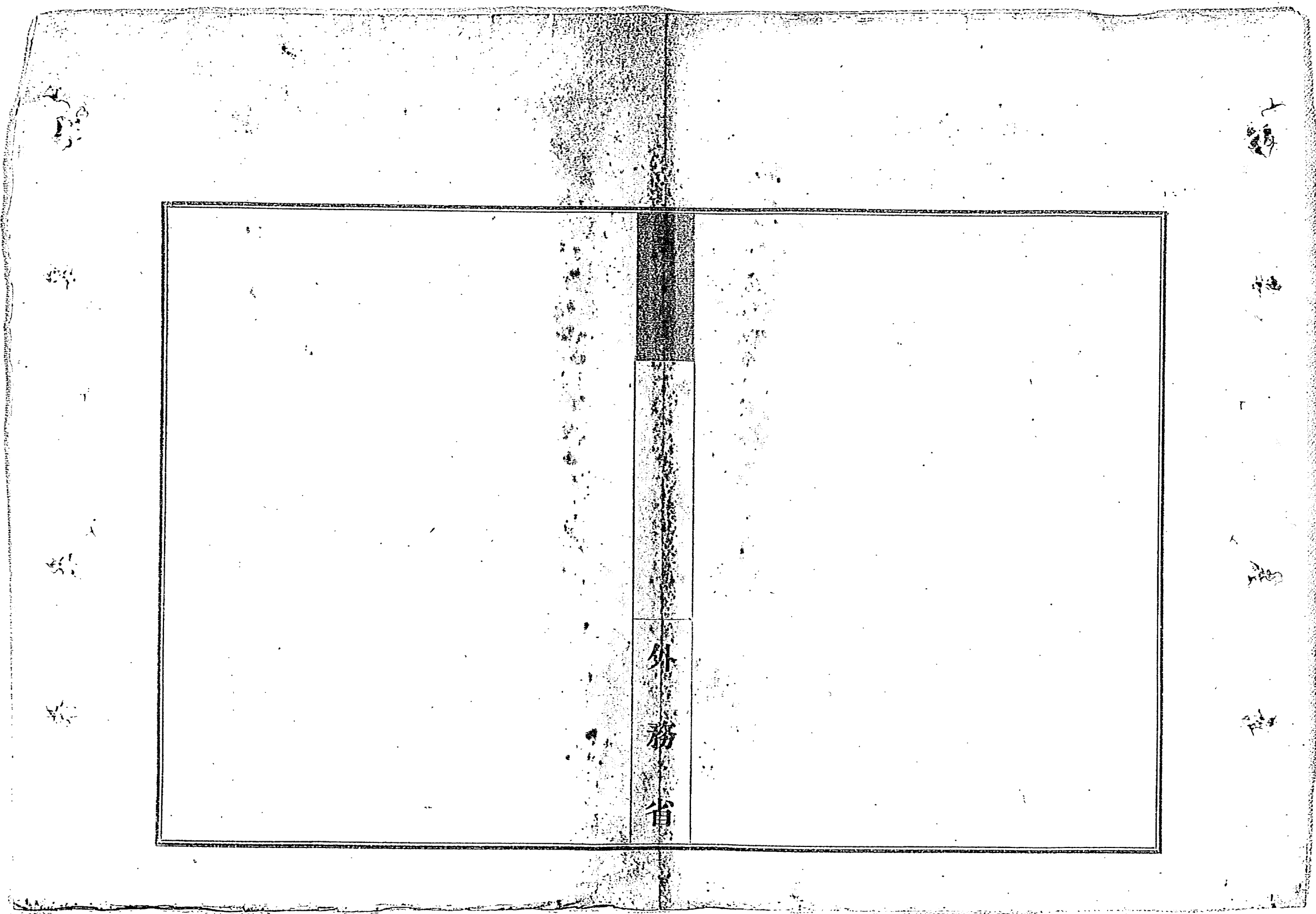




外務省

3-1147

0105

極秘

報告

左ハ在湖北會支某氏ヨリ本會ノ消息ニシテ時節柄頗ル有益ナルモノト信シ且ツ其趣意ハ貫徹ニ充分ノ御努力アラ

第13号
第14号
第15号

- シヨトフ切望スル爲メ此ニ御参考ニ供ス
- 但モ右三項中或ハ既ニ會員中ヨリ意見ヲ経タル向キアルヤモ計ラレザレモ念ノ爲メ重複ヲ厭ハズ此ニ掲載ス
- (一) 聖南独立ニ付 (一月六日附) 一頁
 - (二) 對支急務 (一月二十二日附) 八頁
 - (三) 急告書 (一月二十六日附) 一五頁
- 以上

大正五年二月五日

國民外交同盟會

大正五年二月廿四日臨時第二會議

(一) 雲南獨立の付

一月六日稿

- 其一 袁軍が雲南に至ルハ少クモ百日ヲ要ス
其二 各省人民ハ袁ヲ恨ムモ金ト彈藥ニ窮ス
其三 袁對文急勢ハ倒袁ニ在リ

其一 袁軍が雲南に至ルハ百日ヲ要ス

袁軍ノ雲南討滅ノ速度及結果ハ他省ノ向背ニ至大ノ關係ヲ有シ袁世凱命運ノ決スル所ナリ。

北軍第三師(曹錕)ハ去ル二十八日頃ヨリ湖南省岳州ヲ出發シ常德貴州ヲ經テ進ム可ク、今第七師(張敬堯)ハ北京ヨリ京漢鐵道ニテ南下シ目下漢口ヨリ宜昌ニ向ヒ輸送中ニシテ重慶及叙州ヲ經テ進ム也。

常德ヨリ貴陽府ヲ經テ雲南府ニ至ルニ千四百八十九支那里即チ三百五十五邦里ニシテ其道路ハ概シテ步兵一列乃至二列行進ヲ爲シ得ルノミ。險阻階級多キヲ以テ馬匹及一輪車ノ通過モ困難ナル所アリ。故ニ軍隊ノ行李ハ一輪車及人夫ヲ併用スルナラン。又那軍隊ハ舍營セザル習慣ニシテ推テ天幕ヲ有セズ必ラズ大行李中ニ大天幕ヲ備フ。且ツ冬季ニ際スルヲ以テ兵卒用ノ毛布ニ大行李ニテ運搬セラルベク此ノ如ク大行李ノ輸送力乏シクシテ其荷物大ニ増加スルヲ以テ恐ラク輜重ヲ推テ行スル能ハザルベク之が爲メ先發隊ヲ派遣シテ沿道各地ニ於テ糧食燃料等ヲ購入スルナランモ貴州省ハ原來瘠

地多キヲ以テ其多量ヲ得難シ。故ツテ湖南ヨリ一輪車及人夫ヲ用キ糧食ヲ運搬スルノ必要生ズルモ行程遠キヲ以テ實行頗ル困難ナリ。概リミ以上ノ諸困難ヲ排シテ前進スルモノトスルモ其行程三百五十五里ニシテ毎日平均六里ヲ行進シ四日間一日ノ休息ヲ為スモノトシテ約八十日ヲ費スベク、而シテ師團ハ十數個ノ梯隊ト為リ日ヲ分チテ行進スル必要アルヲ以テ師團全部ノ雲南到着ハ約百日後ナルベシ。

山砲ハ辛クテ運搬得ルナランモ野砲ハ運搬能ハズ其他騎兵、砲兵、騎校用ノ馬匹モ途上馬糧ヲ購入スル頗ル困難ナルヲ以テ斃死スルモノ多カラシ。又那兵ハ長途ノ行軍ヲ為シ給養艱難ナルに至リ強盜ノ焚ハルコトアリ。師長曹錕ハ好人物ニシテ部下ニ對スル威嚴、之シテ旅長張鴻達モ亦タ優柔不斷ナリ。第一次革命後該師が北京ニ於テ擄奪暴動ヲ敢行シタルハ全ク曹錕等ノ統帥法緩慢ノ失ヒレ爲メナリ。故ニ該師ノ雲南行ハ恐ラク貴州省ノ擄奪ニ終ルヤモ計リ難シ。

雲貴兩省ハ恰モ台灣ノ如ク惡性マラリヤロノ流行スルアリテ從來邦人ノ該病ニ冒サレタルモノ多ク、楊子江畔ノ支那人モ之ヲ瘴氣ト稱ヘ大ニ恐レツ、アリ。又先年廣西省ノ騷擾ニ際シ湖北ヨリ一旅團ヲ派遣セシ其人員ノ約五割餘ハ該病ニ罹レリ。現今冬期ニ際スルヲ以テ病勢稍弱カラシモ第三師中興ニ冒サルモノ多カラシ。而シテ該師ハ其藥ヲ携行セザリシ。

(2)
第七師が宜昌重慶叙州ヲ經テ進ムハ先年端方が湖北ノ歩兵一聯隊ヲ率ヒテ四川ニ急行セシ宜昌重慶間ニ三十日ヲ、重慶貴州間ニ十四日ヲ費セリ。今回一師ヲ率キ且ツ冬季江水減少毎行不便アルヲ以テ更ニ其日數ヲ増加シ宜昌重慶間ニ約四十五日ヲ、重慶叙州間ニ約二十日ヲ、叙州雲南間ニ約四十日ヲ費シ合計百。五日ヲ要ス。雲南軍が表ニ買収セラレサル以上此百餘日間ニ於テ他省ノ反旗ヲ

綴スモノアラシ

其三

各省ハ袁ヲ恨ムモ金ト彈藥ヲ欲ス
邦人間ハ段祺瑞、張勳、馮國璋、湯壽潛、陸榮廷等が袁ニ反抗
スルモノトナシ、其舉動ヲ重視シツ、アルモ彼等ハ既ニ年老ハ家富ミ數
多ク妻妾子女ヲ有シ現ニ高官ニ就キ今更ニ年金所キノ爵ヲ得
タルヲ以テ危險ノ境遇ニ立ツコトヲ好マザルベク、之ヲ第一次革命
ニ徴スルニ十月九日夜武昌ニ事ヲ舉グルヤ軍隊中大隊長以上ノ諸官
ハ悉ク逃亡シ革命軍ヲ指揮シタルハ概シテ三十歳ニ滿タザル小隊長及
下士ナリシ。第二次革命亂ニテモ黃興ノ如キ壯年者ハ早ク逃亡シ何處
ノ如キ二十四五歳ノ青年ニ依リテ戰闘ヲ持續サレタリ。故ニ余ハ段、馮、張
ノ如キ輩ハ部下ニ強ヒラレザル限リ容易ニ事ヲ舉ゲザルカト信ス。而シテ
其運動力タル各省青年ハ概シテ帝制ニ反對ノ意向ヲ有シ際ニ乘ジテ事
ヲ舉ゲントシツ、アリ。果シテ然ルヤ否ヤ。

(3)

第一次革命が武昌ニ於テ成功シタル主因ハ僅々二日間ニテ小銃三萬挺
小銃彈六百萬發及硬貨六萬元餘ヲ奪取シ得タルニ依ル第二次革命
亂ニテ多少戰闘ヲ爲シ得タルハ當時楊子江畔各省ニ數多ノ彈藥
若干ノ銀貨ヲ貯藏シアリテ革命軍が之ヲ利用シ得タルが爲メナリ第二次
革命亂後袁政府ハ各省ノ倉庫格統兵器及彈藥ヲ沒收スルノ方針ヲ
取り着々之ヲ北京及保定ニ蒐集シ各省ハ民間ノ兵器彈藥ヲ沒收セリ。
政府ハ更ニ去年十一月十二日各省ニ令シテ殘餘ノ兵器彈藥ヲ北京ニ送納セ
シメ以テ亂徒ノ利用ヲ防ガントセリ(過日大阪朝日新聞)其將軍ノ送納
シテ載セラレタル支那各地ノ兵器員數ハ數年前ノモノニテ今日ハ其數甚
か少ナシ(現ニ武昌ノ兵器倉庫ハ小銃五六百挺及少許ノ彈藥ヲ貯
藏スルノミ。上海及漢陽ノ兵工廠ニテハ兵器彈藥ヲ製造次第遂次
北京ニ送納セラル。又過日東京一將校語ルヲク、東京現在ノ彈藥ハ二週

日、戦闘して消盡せらるべし。然レテ北京及保定ノ倉庫、其ノ數ヲ格納シアリ。又々現今湖北省ハ南軍二師團、北軍一師團半アリテ北軍ニ多數ノ彈藥ヲ支給シ南軍ハ少許ヲ支給スル。各省皆ナ然ラン。故ニ南軍ニテ又旗ヲ紀スコトアルモ直ニ北軍ノ爲メニ討滅セラルベク、現今廣西、廣東、江蘇、浙江等ガ事ヲ舉ゲ得ザル主因ハ彈藥缺乏ニ依ルナラン。

現今各省財政頗ル貧弱ナルノミナラズ袁政府ガ財政中央集權ヲ敢行シ且ツ紙幣ヲ濫發シタル結果各省ノ銀貨準備ハ皆盡トナレリ。故ニ今日華軍ニテ楊子江畔ノ一省城ヲ佔領シ得タリトスルモ彈藥ト金錢トガ缺乏スル爲メ當ニ戰闘ヲ持續スル能ハザルノミナラズ自己ノ軍備ヲ養フニモ困難ヲ感ズルナラン。南支那ハ帝制ニ反對セル青年頗ル多シト雖モ其舉事ハ實ニ難シ。

現今楊子江畔、アル北軍ハ約八師團半（江蘇三師、安徽江西各一師、湖北一師半、湖南一師、又北京ヨリ來リ第七師）アリテ其兵卒ハ直隸、山東、河南ノ三省ヨリ募集セラレ楊子江畔ノ兵丁ニ比シ体格強壯ニシテ且ツ勇敢ナリ。彼等ハ唯ガ糊口ノ爲メ兵卒ニ雇ハレタル者ナレバ概シテ袁ヲ崇拜ス。其將校ノ多數ハ保定ノ陸軍學堂出身ニ係ハリ、袁ノ部下ヨリ教育サレタルモノニシテ殷祺瑞、馮國璋、龍見弼。一昨今以來革命黨ハ北軍各一師ヲ攻心シシムル目的ヲ以テ其内ニ混入セント企テシモ其目的ヲ達セシモノ少ナカリシ。近來北軍ニテモ革命黨ノ企圖ヲ察知シタルヲ以テ各隊ノ書記人夫ニ至ル迄北方人ヲ使用シ以テ革命黨ノ混入ヲ防ギツ、アリ。楊子江畔ノ北軍ガ意心セザル以上革命黨及帝制反對者ノ舉事ハ難シ。

又鄂西次ノ革命黨ニテ經濟界ヲ萎靡セシメ歐洲戰乱ハ益ス之ヲ不振ナラシメ近來八段丸沈没郵船會社汽船ガ喜望峰近辺ヲ決行セシ以來歐洲行ノ船腹運減運賃暴騰ヲ来シタル爲メ支那農

(4)

産物輸出ハ強ト中止ノ姿トナリ加之上海事変帝獨立及其他ノ論
言百出ニ銅貨及銅貨紙幣ノ相場下落ニ一大恐慌ヲ起サントシ
アリ。而シテ人民ハ一般ニ之ヲ帝制ノ結果ナリト信シ益々表世凱ヲ恨
ツアリ。北京政府ハ歐洲戰乱以來外債募集ノ困難ナル爲メ小借款内債
紙幣増發等ノ手段ニテ一時ヲ彌縫シ來リシガ昨夏以來漸次各種ノ新
稅増稅ヲ漸行シ恰モ經濟最凋竭ノ時機ナルヲ以テ人民ノ不平甚
ク然カモ北京ニテハ帝制準備ノ爲メ濫費多キヲ以テ人民ハ益々表
ヲ恨ミツアリ。其他揚子江畔ニ於ケル北軍兵士ノ人民虐待帝制反對者
ニ對スル極端ナル壓迫新舊輿論ニ對スル極端ナル制裁突如
封爵(曹錕)李鴻章スラ死後(段祺瑞)等ノ表が民心ヲ失フ事由
頗ル多シ

前述ノ如ク北京政府及各省ハ帝制準備ニ以テ財政ノ急ヲ救フ
ノアリテ政府立ノ交通銀行ノ如キ其紙幣發行額四千萬元以上ニ達シ
豫ラズ準備銀トモテ五萬元ヲ有セザルバク在漢口交通銀行或モ如キ
既ニ百萬元以上ノ紙幣ヲ發行シタルノ係ラズ近來四萬五千元ノ紙幣
支拂ノ窮乏アリ。其支拂人該支店ニ銀一萬兩ヲ預ケアリテ先月
其全部ヲ引キ出サントシタルニ言フ左右ニ托シテ僅カニ三百兩ヲ得
タルノミ

(5) 揚子江畔ノ各省ハ帝制ニテ惡紙幣ヲ濫發セラレ其後各省ハ之
ヲ回收スル義ノ下ニ數多ノ新紙幣ヲ濫發セリ。從來各省ノ官錢局
ノ官立銀行(ハ數多ノ不動産(土地家屋)ヲ野有シタリシガ昨春其
全部ヲ北京財政部ニ沒收セラレタリ。從來各省ノ錢金ハ概シテ官錢
局ヲ經由セシガ昨夏以後ハ交通、中國ノ兩銀行ヲ經由スルコトニ改
正セラレタリ。故ニ各省ノ官錢局ハ準備銀、不動産、金錢ノ經由等
皆無ナルノ係ラズ省毎ニ五萬元乃至三十萬元許リノ紙幣ヲ發行

シアルナリ。北京方面、居住セル邦人ハ財政部ノ作レル豫算決算ノ空文ヲ見テ支那財政ヲ樂觀スルモノアリト云々一度地方ニ赴キ紙幣中濫發ヲ實視セバ其危險ナルヲ驚シナラン。然カモ今、經濟界ハ不振ノ極ニ達シ且ツ帝政準備、各省警備、雲南討伐等ノ數々、臨時費ヲ要ス故ニ此際外面ヨリ借款ヲ得ザランカ、政府ハ各省ハ是ニ紙幣ヲ濫發スルノヒムヲ得ザルニ至リ其結果紙幣相場下落シ帝政經濟上ノ恐慌ヲ來スノミナラズ是ガ為メ人心大ニ動搖シ軍隊ハ盜賊ニ化シ遂ニ天下大亂袁政府滅セサルヤモ計リ難シ。

以上諸項ヲ綜合スルニ各省ニ金錢彈藥欠乏スルヲ以テ反旗ヲ翻スハ頗ル困難ナランモ民心ハ日ニ衰世凱ノ叛キツ、ハルヲ以テ遂ニハ破裂ヲ免レザルハ、而シテ袁ノ運命ハ主トシテ借款ノ能否ニ在リ。

其三 我對支急勢ハ倒袁ニ在リ

歐洲戰爭ノ現況ニヨリ察スレバ聯合國ハ獨逸軍ヲ殲滅スル能ハズシテ獨逸ハ戰後急ニ國力ヲ恢復シ先ヅ支那及南洋ノ市場ニ於テ我邦ト經濟的大競争ヲ試ムベク終リハ獨逸同盟シテ我邦ト戰端ヲ開クコトアルヤモ計リ難シ英國モ國內ノ損傷少ナキヲ以テ戰後直ニ工業ヲ回復シ得ベク彼ハ我邦同盟タルニ係ラバ從來支那ニ於テ經濟上利権上殊ニ外交上我邦敵視シツ、アリテ戰後モ亦我邦ト大競争ヲ試ムベク米國モ亦々漸次東亞ニ向ヒテ發展シ來リ着々軍備ヲ擴張シツ、アルヲ以テ吾ニ我邦ト經濟的競争ヲ為スノミナラズ遂ニハ開戰スルカモ測ラレバ即チ我邦ハ歐洲戰後、於テ獨逸米、強敵ト經濟上ノ大競争ヲ為シ其勝敗ハ我が軍備擴張ノ結果ヲ決定シ其能否ハ我邦ノ興亡ヲ決定ス。

(6) 將來ノ戰爭ニハ唯、軍隊艦隊ノ増加ヲ以テ足レリトセズ兵器及各種軍用器ノ獨立ヲ以テ最も必要ノ事項トス就中製鉄、製鋼並其

他ノ工業、擴張進歩ヲ最大要務ト爲シ而シテ鐵礦、製鐵用ノ石炭、並
鉛鐵、及各種工業ノ原料ハ我ニ乏シテ支那ニ乏シ又タ是レ等ノ事
業ハ概シテ十數年ノ長日月ヲ經ル、非レバ成功スル能ハザルヲ以テ
我邦ハ今日ヨリ大速カラ以テ之ヲ着手セザレ可カラズ。

我國ハ右二項ノ目的ヲ達スル爲メ並ニ東亞ノ國基ヲ固メル爲メ
支那ト相提携スルノ必要ナルコトハ余ノ喋々ヲ待タザル所ニシテ歐洲戰
乱即チ千載一遇ノ好機ヲ利用シ兩國提携ノ障礙ヲ一掃セザレ可カラズ。
余ハ第一次革命以後屢バ我が當路者ニ言フ商ノミ、曰ク、支那統
治者トモテハ一袁世凱アルノミ。日文提携ハハ必ズ袁ト親マザル可
ラズト。當時余ハ謂ヘテリ、袁ハ到底我ト親ミ得ル人物ニ非ルモ我邦
ニ大人物無ク、當局ニ果斷者無ク、且ツ列國ニ對スル關係上、袁ヲ倒ス
コトハ到底不可能ト信ジ默々付シ去レリ。然レニ袁ハ日清戰役、西
次革命亂、亡命者、我邦内居住、對文交渉、帝制警告等ニ感情ヲ害
シタルミナラス彼ハ米ト親ミテ我が南滿洲及利権獲得ヲ妨ゲ獨結
ビテ我對文發展ヲ妨ゲ、且ツ互ニ兵器同盟ヲ結バントシ又タ屢バ英美獨
利用シテ我外交ヲ妨害セリ。加之、彼ノ詐偽的術策ハ大ニ我國民ノ感
情ヲ害セリ。試ミ、我が新聞ヲ見ヨ、一日トシテ袁ノ惡口ヲ記セザルナ
シ。是レ原ヨリ記者ノ不謹慎ニ依ルト蓋ニ公憤ヨリ發シタルモノニシテ
是レ依リ袁ト我國民トハ性情相反ニ到底相親ミ得ザルコトヲ證明
スルヲ得可シ。袁モ日々我が新聞ヲ見テ我ヲ敵視スベク、又タ近日ノ上
海事變ハ我邦人ノ之ヲ參戰シタルモノアリ殊ニ魯南獨立ハ我邦人ノ參加ス
ル者ヨリカラン爲メ、袁ハ益々我ヲ仇敵視スベク我邦が縱令如何ナル政
策ヲ用ユルニ袁ト親近スルコトハ絶對ニ不可能ナリト斷言スルヲ得
シ。袁ハ唯々而國提携ノ一大障礙物ナルミナラス歐洲戰役ニ於テ彼
レ必ズ米獨ト提携シ米ノ利権ヲ英ヘテ借款ヲ得ントシ獨逸軍人ヲ聘シ

大陸軍ヲ改革シ、彼ト兵器同盟ヲ結び獨人ニ依リテ工業革命ヲ期スル等
ノ我發展ヲ阻害スル行動ヲカラン。

帝制尙出現以來袁ハ唯一ノ統治者タル資格ヲ失ヘリ。第一軍ヲ僅
定シ得ルトモ既ニ民心ヲ失ヒタル以上動乱止ム時無ク遂ニ滅亡スルナラン。
故ニ袁ハ統治者ノ資格無キノミナラバ動乱製造者ニシテ東亞平和ノ攪乱
者ト断言スルヲ得可シ。

或曰ク今日袁ヲ倒スルハ彼が兵力ヲ有スル以上大動乱ヲ免レザル可ク、又々
彼ヲ倒シタル後、於テモ適當ノ統治者ヲ得ル迄ハ騷亂絶ヘザル可ク、我經濟
上ノ損失至大ナリ。故ニ今日ハ我が改進黨ヲ棄テ對支貿易ノ大地歩ヲ佔得スベキ好機
ニ非ズヤト。余答テ曰ク袁ヲ倒ササルモ動乱止マザルベク、若シ適當ノ統治者ヲ得ザル場
合ハ我邦ハ擁護ノ地位ヲ立テ得ルヲ以テ却テ有利ナルニ非ズヤト。或曰ク我邦ハ又
那ノ内政ノ閑渉ス可ナラズ、我ハ宜シク中立ノ態度ヲ取ル可シ此ノ如クスルモ袁ハ遂
ニ倒ルニ至ラント。余答テ曰ク、國際關係上我邦が表面ヨリ袁ヲ倒スコトハ不可能ナラン。
然レモ我政府が中立ノ態度ヲ取ルモ我國民ハ袁ヲ助ケ或ハ革命ヲ助ケルナラン。
現ニ大倉ハ北京ニ於テ借款運動ヲ爲シソナルニ非ズヤ、其金額ハ臨時費ニ使用セザル
ルヤモ計リ難シ。我邦有一部ハ曹汝霖ヲ助ケントスルモノアルニ非ズヤ。此ノ如クモテ我ハ袁
ヲ倒シ革命ヲ期スルハ何等得ル所無シ。然レテ袁が英ハ此向ニ於テ暗ニ種々ノ策ヲ弄
シ利益ヲ獲得シ時宜ニ我ヲテハ袁政府ニ借款シテ其滅亡ヲ防グヤモ計リ難シ。兩次革命
乱ニ對スル我政府ノ中立態度ヲ味ハハ吾等半ハニ過ギント。或ハ曰ク袁ハ此迄邦ノ勢カアルヲ
以テ對支貿易ハ二分セラル可ク、以テ袁ノ代ニ漢人ヲ以テモ第二ノ袁ヲ作ルモノナリ宣シ
滿人ヲ立ツベシト。余答テ曰ク袁ヲ倒スルハ容易ノ事ニ非ズ其間形勢ハ種々ト変ス。故ニ今
日ハ先ガ討袁策ヲ講シ其後ハ嗣後ノ形勢ニ應ジテ我ニ有利ナル如ク進マカント。
漢人ハ革命ノ急敵ハ我輩ナルニ衆ニ曹汝霖ヲ立テ利用シ道義上東洋平和保持上支那民族ヲ
救フのみ、我が改進黨ノ経営ヲ利スのみ、日支兩國提携ノのみ、我が國民心ヲ一ニシ袁ヲ倒ス左
リ、其手段タル列強ノ對袁借款ヲ妨害シ且ニ暗ニ反對派ニ資金を貸スルヲ以テ進ミリトス。

(三) 對支急務

一月二十日稿

曩々卑見ヲ呈シ倒袁策ヲ唱ヘタルモ我朝野ハ未だ決セザルガ如シ。袁軍ハ漸ク四川境ニ入リテシ廣東廣西未だ起タズ我ノ優柔不斷ハ遂ニ絶好機會ヲ逸シ古ルノ憾アルヲ以テ更ニ才ニ卑見ヲ呈スルコト左ノ如シ。

支那現狀ニ對スル我政策ニ付諸士ノ意見ヲ聞知スルニ大約左ノ五項ニ歸スルガ如シ

一、誠意ヲ以テ帝制警告ノ主旨ヲ貫徹スルコトヲ期シ其他ハ形勢ヲ觀望シ時ニ應ジテ策ヲ決ス可シ

二、先ヅ華黨ヲ暗助シテ各地ニ動亂ヲ起サシメ然ル後居留民保護ノ名義ヲ以テ我軍陸軍艦ヲ派遣シ其間ニ於テ利権ヲ領有セシ。

三、袁政府ニ借款ヲ為シ且ツ適當ノ時機ニ於テ帝制ヲ承認シ以テ從來ノ惡感ヲ一掃シ彼我提携ノ基礎ヲ固メ同時ニ利権ヲ佔ム可シ。

四、華軍黨ヲ暗助シ袁政府ニモ借款シ時宜ニ依リ我ヨリ兵力ヲ關涉ヲ為シ支那ヲ南北而立シノ將來ニ於テノ我政策ニ便ナラシム可シ。

五、華黨ヲ暗助シテ袁ヲ倒ス可シ。
左ニ此五策ノ利害ヲ論ベシ。

第一策ノ利害

(8) 誠意ハ外交ノ秘訣ナラン。然レモ今固ノ警告ニ對シテ袁及帝制派ハ悉ク我誠意ヲ感ぜザルノミナラス却テ我邦ヲ恨ミツキアリ。袁ハ窮スルノ餘リ一時ハ我ニ憐ヲモフコトアランモ永久我ヲ敵視スル

ナラン。殊に同盟する英國迄がモリソン、ジリダンヲシテ我誠意ヲ無
視シタル行動ヲ取ラシメタルに非ズヤ。又シ警告ノ主旨ヲ貫徹スルコトハ何
人ト密に同意スル所ナラン。然レ其主旨より帝制ヲ延期スル迄ノ事ニ
シテ時機到來セバ帝制ヲ承認スルノ已ムヲ得ヤルに至ラン。果シテ然ラバ承
認後、於テ我邦ハ袁ヨリ敵視セラレ支那人民ヨリ輕侮セラル、に至ラン。形
勢ヲ觀望シ時ニ應ジテ策ヲ決スト云フ事ハ我當局者ガ。陛下ニ對シ奉
リ國民ニ對シ慎重事ヲ處スルノ意ナルヲ以テ吾人ハ別ニ異議ヲ稱ヘザル
可ク殊に不可思議極マル支那問題ニ對シテハ深ク輕率ヲ戒メザル可カラ
ザルナリ。然レ此政策ノ實行ハ之ガ準備ニ多少ノ時日ヲ要スルヲ以テ
機熟シタル後、盜竊結シ策ヲ決シ遂ニ準備ト實行トノ時日ヲ失フ
ヨリ寧ろ拙速ヲ良トス。而シテ一次革命ノ對スル我政府ノ態度ヲ
見ヨ。何等次スル所無カリ。一非ハヤ、支那事情ノ不可思議ナル如何ナ
ル事更ニテモ結了後、アラザン其眞像ヲ偵知シ難ク之ヲ偵知シタル後、
於テ策ヲ決スレバ即チ時機ヲ逸ス。然レ我政府ハ元來アリ反對
黨アリテ政策ノ決行ヲ遲滞セシムル恐レタキヲ以テ政府ハ宜シク
過早ニ決心ヲ固メ猛然之ヲ決行スルヲ良トス。

(7) 論者或ハ謂ハシ、袁ハ既ニ民心ヲ失ヒタルヲ以テ我ニシテ警告ノ主旨ヲ
貫徹シ更ニ第三回ノ警告ヲ發シ彼ヲ一層窮境ニ陥ラシムレバ彼ハ自
ラ倒ル可シ。故ニ革命ヲ暗助スル如キ我野心ヲ暴露スル如キ行動ハ
此際大ニ慎ム可キナリ。余謂ヘラク、袁ハ此ノ如ク容易ニ倒ル、愚物
ニ非ズ。且フ前報(袁帝獨立ニ付)ヲ再讀シテ其向ノ消息ヲ察知セテレ
タリ。若シ我政府ニシテ袖手傍觀シ袁軍遂ニ雲南ヲ平定シ袁が帝タル
ノ目的ヲ達シタル曉ニハ我帝制警告ハ袁及帝制派ヨリ恨マレ敵視セ
ラレ支那人民ヨリ輕侮セラレ猶更ハ之ニ集ジテ巧ニ袁ト結ビ我對立
展ハ大ニ妨害セラル、に至ラン。

即ち第一策ハ我減意ヲ無視モラルノミナラズ却ツテ敵視セラレ且ツ
無為無能ニ終ル姑息極マル策ナリ。

第二策ノ利害

袁ヲ倒ス決心ナクシテ華黨ヲ暗助スルハ袁ヨリ嫌ハシ支那人民ヨリ警備
セラル國タラン

出兵シタリトテ利権ヲ獲得シ得ルモノニ非バ。現ニ我が支那派遺隊
ノ如キハ我利権獲得ニ絲毫ノ便宜ヲモ與ヘザルニ非バヤ。動乱ノ際ニテ
利権ヲ獲得スル事モ亦タ容易ナルモノニ非バ吾人ハ第一改革命乱ノ衆
ジテ漢治薛、帝導鐵道、招商局阜豐、武運、諸工場等ヲ我手裡ニ收メ
シトテ大ニ勢力セシモ得ル所ナリ。即チ第二策ハ巧妙ナル如キモ其實益ハ
極メ小策ナリ。

第三策ノ利害

某曰ク袁政府ハ財政ニ窮シ歐洲列強ハ戰爭ノ為メ借款ノ餘力無シ此際
我ヨリ袁ニ借款セバ大ナル利権ヲ得ベシト。余答フ曰ク上海ニアル英佛獨
ノ各銀行ハ現今トテモ猶ホ多數ノ銀塊銀貨(合計二千五百萬元以上)
ヲ貯藏シアリテ費用途ニ充テツアリ。若シ袁ヨリ有利ナル權限ヲ呈供
センカ彼等ハ好ミテ借款ノ應ニテ、米面殊ニ然リ。

袁ノ性質ヨリ察スルニ彼ハ愚ヲ知ラズ今日彼ヲ助クニハ彼ハ益々増
長シテ我ヲ輕侮シ彼ハ依然米獨ト提携スルヲ我發展ヲ妨害スルナラ
ン。殊ニ支那人民ハ我ヲ恨ミ我ヲ輕シタルニ至ラン。

今日袁ヲ助ケテ小利権ヲ對文交渉第五項ノ權利ヲ獲得スル
事ハ我主義ヲ波却スルモノニシテ朝野ノ反對スル所ナラン。

即チ第三策ハ小利権ノ為メ大局ヲ誤スモノナリ。

第四策ノ利害

支那ハ北ニ貧シク事ニ富ミ北方ノミニテハ財政ヲ維持スル能

(10)

ハズ。北人ハ概シテ安率ムルニ適シ、南人ハ概シテ之ニ適ミズ。而シテ海軍ハ主トシテ福建、廣東両省人ニテ組織セラル。北人ハ惡ミシテ南人ハ智アリ、袁政府ノ官吏ヲ見ルハ廣東、安徽、浙江、江蘇等ノ南人多シ。其他經濟上南北物資ノ相交換セラルモノ頗ル多シ。是レ等ハ皆ナ支那カ南北ニ分立シ得ザル原因ナリ。故ニ我邦ハ縱令兵力ニ訴ヘ分立ヲ期セントスルモ其目的ヲ達シ難ク、縱令分立シ得タリトスルモ是レ一時ノ変態ニシテ遂ニハ統一セラルベク、殊ニ列強ハ債款ノ關係上分立ニ反對スルナラン。

即チ才力四策ハ實行シ得ザル愚論ナリ。

第五策ノ利害

(11)
吾人カ他國ノ主權者ヲ倒スト云ハ、常人ハ目レテ狂者ト云ハシ。然レモ歐洲戰亂ノ非常ナル時機ニ處シ袁カ道義ヲ設却シテ暴徒ノ行爲トスル特別ノ場合ニ當リテハ吾人モ亦モ非常特別ノ行爲無クシテ可カラズ。袁ヲ倒スニハ大動乱ヲ免レザルベク、袁五平和ノ責任ヲ有スル我邦ハ遂ニ出兵シテ各國人ヲ保護スルノミナラズ遂ニ我兵力ヲ以テ支那ヲ統治セザル可カラザルニ至ルヤモ計リ難シ。是レ戰役後ノ媾和會議ニ當リ我カ兵力ヲ分散スルノ弊ヲ生ジ忽チ列強ヨリ干涉セラレ我カ既得ノ權利ヲモ失フニ至ラン。然レモ支那各省ヲ統治スルニ支那軍隊警備ヲ利用スルトキハ我出兵ハ少數ニテ《數個師團》可ナルベク、歐洲列強カ戰役直チニ我ニ肉戦スルトハ無クモシ。歐洲戰前ニ於テ我邦ハ列強ノ肉戦ヲ恐ルハ爲メ支那問題ヲ解決シ得ザリシノミナラズ我カ對外交ハ大小共ニ英ノ鼻息ヲ窺ヒタルヲアラヤ。然カモ今日歐洲戰事酣ナルノ絶好機會到來セシモ我ラズ我カ戰役ノ媾和會議ヲ恐レテ世爲無能ニ終ランカ、將來永久ニ我カ發展ノ時機無カル可シ。

某曰ク、今日我邦カ支那ニ於テ權利ヲ得ルトモ戰役ノ媾和會議ニ於テ之ヲ放棄ハルトキハ斯クテ我ラズ我カ戰役ノ媾和會議ヲ恐レテ世爲無能ニ終ランカ、將來永久ニ我カ發展ノ時機無カル可シ。

リトスト。余答曰ク原ヨリ然リ。然レバ我邦が今日得タル權利ノ全部ヲ放棄スルヤキ哉。外交ハ行ハレザルハク、縱令其一部ヲ放棄スルモ其甚クテ保衛スルコトヲ得バ是レ即チ我邦ノ一大利益ニアラスヤ。其、論ハ消極的ニシテ終速速カシク我邦が千載一遇ノ好機ニ際シ用ニベキ策ニ非ズ我邦ハ此際宜シク猛進ス可シ。

某曰ク、邦人ノ其々ハ第一次革命ノ際ニ或ハ官軍ヲ暗助シ或ハ革命軍ヲ暗助シ或ハ革命軍ヲ煽動セリ。是が爲メ支那人民ハ一般ニ邦人ヲ嫌厭シ我ニ大野心アルモノト誤認シ大ニ外交ヲ害シタリ。我ニザル可カラスト。余答曰ク、是レ全ク我政府ノ無方針ナル結果ナリ。政府ニシテ確乎タル方針アリテ適當ニ國民ヲ指導スルヲ得可シ。

某又曰ク、兩次革命ノ間我邦ノ革命軍ヲ暗助シタル者アリシニ係ラズ革命軍ハ敗北セリ。今面トテ革命軍ノ成功ヲ願ハシ。確實ニ表ヲ倒ス見込無キ以上我政府ハ表裏共ニ中立ノ態度ヲ取ルヲ良トス。余答曰ク、第一次革命ノ初ニ於テ大倉ハ多量ノ銃彈ヲ官軍ニ賣ルニ獨逸ハ青島ヨリ砲及砲彈ヲ官軍ニ供給セリ。然レテ我政府及ビ人民ハ革命軍ニ安撫彈藥ヲ賣ルヤリシ。(護陽戰後ニ賣ルハモソアルモ其前ハ絶對ニ無シ)故ニ革命軍ノ敗國ヲ表平組合ト獨逸トニ帰スル事ヲ得可シ。第二次革命ノ際ニテモ我邦萬壽之助が率先シテ袁政府ニ大借款ヲ爲シ袁ハ此金ヲ利用シテ革命軍ヲ買収シ遂ニ勝利ヲ得タリ。故ニ革命軍ノ敗國ヲ我邦ニ帰スルコトヲ得可シ。今や民心ハ全ク袁ニ叛ケリ。若シ袁ニ借款ヲ與ヘズ而シテ革命軍ニ安撫彈藥及ビ金員ヲ給スルコトヲ得バ容易ニ袁ヲ倒シ得可シ。然レテ事ノ成敗ハ天ナリ第一ニモ袁ヲ倒スルコト能ハザル事アルヤモ計ラズ。左リトテ第一ノ失敗ヲ恐レテハ遂ニ何事モ爲シ得ザルベク、縱令失敗シタリトテ之ニ處スル策ハ多クアルト非ヤ。

某又曰ク、日支兩國相距ル甚ク近ク、我貿易最煩ル迅速ニシテ支那ノ富ヲ我ニ吸收シ支那ノ鐵山、工業等ハ漸次我手ニ帰シ我ハ將

來滿蒙山東に於テ大發展ヲ為ス可ク、我が津滬ノ使が支那各地ヲ徘徊
スル等支那人民ノ感情ヲ害スル事情難ルナシ。縱令袁ヲ倒シタリトテ
再ビオニノ表ヲ生ズ可ク、此ノ如クニテ兩國ノ提携ハ到底望ム可カラズトモバ
敵ヲ表ヲ倒スノ必要無キ、非スヤ。余等チヨク、オニノ表ハオニノ表ニ比シ詐
術ヲナク誠ヲ示シ恨ムコト及ビ米獨ニ親ニ程度に於テ著シク減サスルナ
ラン。同時、左ノ利益ヲ生ズ。

支那が財政上大ニ衰頹スルハ世人ノ當首スル所ナラン。然カモ此
キ將來に於テ列強協同ノ保護國ト化スルヲ計ラレシム。而シテ今更ニ帝制
問題及皇室事變ハ益々其時機ヲ早カラシムルモノナリ。列強が支那政治ヲ
關涉スル場合ニ至リバ我邦ハ債權少ナキヲ以テ關涉ノ勢トモ亦ハ微弱ナ
ラン。是レ東洋ノ一大不幸ナリ。故ニ我ハ既戰ノ機ニ乘ジテ表ヲ倒シ、第
ニ、統治者ヲ擁護シ預ジメ支那擁護ノ聲カヲ植立シ置キ、良モトス。
原ヨリ改戰後ノ協和會議ニテ是ヲ其勢力ヲ減退セラル、恐レアリト宜ク我ハ
先ヅ支那擁護ノ實創ヲ作り且ツ其勢力ハ一部ヲ永久ニ保護シ得ナラン。

結 論

支那問題ノ解決ニ付種々ノ考案アリ。然レハ終對ニ發展ノ基礎
ヲ確立スルト兩國提携ヲ期スルト事ヲ以テ最要ト為サン。而シテ更ハ從
來ニ於テ既ニ大ニ兩國提携ヲ妨害シ今更ニ帝制警告ニテ一層彼ノ情感
ヲ害セリ。又收ハ米獨美ノ勢力ヲ利用シ《同時ニ歐三國ノ對支發展ヲ利
スル者ナリ》テ緩急展ヲ妨害ス。故ニ表ヲ倒スニトハ我對支政策中第
一ノ事項ト認ム。然カモ倒表ノ時機ハ今日ヲ以テ對列國關係及對
支那民族關係上絶好ノ機會トモ且ツ其目的ヲ達スルハ曉ハ我邦ハ
諸種ノ權利ヲ獲得スルノ公算甚シ。是レ余々再三倒表ヲ主張スル所
以ナリ。

倒表策ノ實施ニ付

(3)

第一次革命の運命は漢陽戦の勝敗に依りて決し第二次革命の運命は官軍が漢陽前と武漢及び江を佔領するに依り決せり。而して革命軍の同情ある邦人ハ概して運命を決したる後、於て渡文を以て折角の努力を遂ぐ水迫に帰せり。

雲南軍の運命ハ袁軍が雲南軍の主力ヲ撃破スルニ先テ廣東廣西が起す得ルヤ否ヤに依りて決セラルナラン。而して該二省ノ向背ハ主として兵器彈藥ト金錢トに依ルコトハ既に前報(雲南獨立の件)にて詳述せり。

袁軍の總指揮官の曹錕(第三師長)ハ優柔不斷ナル人物ナルモ第七師長張敬堯ハ年未だ四十ニ滿クバシテ支那人中ニ傑出セル勇將ナリ。彼ハ先年率兵ニテ漢陽ヲ破リ江西ニ於テ李烈鈞ヲ破リ白狼ヲ甘肅迄追追セリ。今面モ彼ハ宜昌ヨリ萬難ヲ排シテ猛進シツアリテ該師團ノ先頭ハ二月初旬に於テ重慶ニ達スルナラン。其他諸般の狀態に依り察スルニ廣東廣西ノ二省ハ遲クモ二月下旬迄ハ態度ヲ決スルヲ豫メシ之ニ先タテ錢ヨリ兵器彈藥全負ヲ供給スル必要アリ。

袁政府及各省が財政に窮スルコトハ前報(雲南獨立の件)ニ詳述セリ。故に倒袁策中最要ノ事項ハ列國ノ借款ヲ妨害スルニ在リ。然しテ現今三井大倉等ノ錢豪商ハ袁政府ニ對シテ借款運動中ニシテ是等ハ一ハ利権ノ爲メ大局ヲ誤ルモノナリ。袁政府ヨリ至急差止メラレンコトヲ切望ス。

《以上》

(14)

(三) 急 告 書

一月二十六日發

拜呈 貴會 貴會ハ山砲約五十門アルモ機關銃ハ僅カニ六七挺
ヲ有スルノミ。第一次革命ハ微スルミ支那ハ一級ノ機關銃ヲ恐
ルハコト甚シク其音聲ヲ聞キテモ早クモ逃走スル者有之。而
シテ表軍ハ機關銃數多有之候。張敬堯ノ率エル第七師ノ先
頭ハ去ル二十日頃ヨリ陸續重慶ニ着シツアリ。最モ恐ルベキ
ハ此師團ノ兩座候。但シ張ハ計畫ニ及ビキ勇者ナルヲ以テ先頭
部隊ヲ顧慮セズ有ラニル船ヲ微發ニテ急行シタル故重慶到着早カ
リモモ師團全部ノ到着ハ来月中旬以後ト愚考候。

事候。

(表ヲ倒スコトハ)

想ツ、来月初旬内政府ハ決心セザル以上ハ異変ナキ以上ハ頗
ル困難ニシテ或ハ遂ニ吾人ノ目的ヲ達シ得ザルニ至ラント存候。
左リトテ表軍凱反對ニ各將軍等モ此際其準備ナク萬一ヲ境
俾ニテ旗ヲ舉グルコトハ考ヘ物ニ候。

此際也、貴會各位、兩法動向努カヲ祈リ申シ候。勿々。

(以上)

極秘

報告書

右ハ在湖北會友某氏ヨリ本會ヘ宛テタル第三面目ノ來書ニシテ
軍事的關係ヨリ觀察シタル南北西軍ノ狀況並ニ我國ノ執ルベ
キ急務ヲ急報シ来リタルモノナルヨリ茲ニ報告ス

大正五年二月二十二日

國民外交同盟會

三度對支急務ヲ絶叫ス

表ニ面卑見ヲ呈シ倒袁ヲ称ハルモ我實業家中軟弱ナル意見ヲ有
ル者アリ在北京人向ニモ姑息ナル策ヲ主張スル者アリト聞キ錢邦ハ
議會開會中ニテ小問題ヲ争ヒ最大急務ヲ南部スル傾向アルヲ耳ニシ
然レテ時機ハ漸ク切迫シ来リタルヲ以テ重複テ厭ハズ第三面ノ卑見
ヲ呈ス

其一袁カ近年ニ於テ我經濟的發展ヲ妨害シタル事項概要

我東亞興業及中日實業公司ハ外務省ノ勸誘ニ依リ我實業家中有
力者ヲ網羅シテ成立シタルモノニシテ西國ノ經濟的提携、支那經濟的開發
我ノ利権獲得等ニ關スル唯一ノ機關ナリ、東亞興業會社ノ五箇年間に
唯一ノ事業タリシ漢口水電公司ニ對シテ袁政府ハ昨秋米國借款ニヨリ
我借款全部ヲ返済シ我權利ヲ放棄セシメント企テ其後米國借款不成
功ナルモ袁政府ヨリ出資シテ我權利ヲ消滅セシメントシ現今其事論議
アリ、京滬鐵道ニ對シテモ二箇年以來屢々我借款ヲ妨害シ昨秋ニ至リ
支那通惠公司ヨリ資金ヲ出サシムルコトニ定メ以テ我權利ノ幾分ヲ減
殺セント勉メツアリ、又中日實業公司ニ對シテ袁政府ハ昨午以來屢々
殺セント勉メツアリ、又中日實業公司ニ對シテ袁政府ハ昨午以來屢々

第四項 第九
大正五年二月廿八日記録第二部接受

事が北京ニ赴キタル際ノ如キ 袁政府ノ官吏及支那側當事者ハ表面
大ニ歡迎シ且其事業ニ付イテモ口頭ヲ以テ承諾シタルコト多ク 某々等ハ大得
意ニテ歸國シタルモ後日ニ至リテ之ヲ実行シタルコト無し 即チ該公司ハ
創立後既ニ三年ヲ経過シタルニモ係ラズ唯ハ袁ヨリ翻弄セラレタルノミ
ニシテハ一事ヲ成シ得ザリシ 加之ラズ作夏袁政府ハ一層該公司ニ壓
迫ヲ加フル目的ヲ以テ通惠公司ヲ新設シ全ク中日實業公司ノ事務ヲ奪
ヒ去レリ是レ實ニ一公司ノ全滅ノミニ非ズ大ニ我利權獲得ヲ阻止セラレタ
レモノナリ

余ハ數年來西國合辦事業ハ 都テ袁政府ヨリ妨害セラレ中日實業
公司ト同様ノ悲境ニ陥ルコトヲ觀破シ大ニ反對ヲ稱ス來リシモ 昨春
以來大藏省及我實業界中共同ノ消息ヲ解セサルモノハ頻リニ合辦事業
及日支銀行ノ創立ヲ主張セリ 果セバ袁政府ハ其企圖ヲ聞クヤ直
チ御用新聞ニテ我レニ支那財政監督ノ野心アルトシテ之ヲ攻擊シ各地
新聞モ之ニ和シテ大ニ輿論ヲ喚起セシメタリ 然レテ一方 米支銀行 米支
實業會社 米支汽船會社等ノ企圖ニ對シテハ大ニ之ヲ歡迎シツアリ是
レ原ヨリ米國ノ政策及宣教師等ノ努力ニ依ルト雖モ主トシテ袁ノ意
思ヨリ發せしモノナリ

我官渡渡負々素蒙等ノ支那遊歴ニ際シテハ各地方共ニ表面大ニ歡
迎シツアルモ支那居住ノ邦人ニ對シテハ支那官商共ニ親シク交際スルコトヲ
避ケツルヲ以テ袁ノ日本ヲ嫌厭スル意思ハ自然ニ各省ニ傳ハリタル
モノニシテ特ニ邦人ト親シク交ル者アルハ袁政府ヨリ疑ハレ遂ニ罷免セラ
ルニ至リ 湖北省鑛務督辦兼官錢局督辦高松如氏ノ如キハ多年
邦人ニ親シク邦人ノ力ヲ藉リテ湖北ノ財政及實業ヲ發達セシメタル人物ナニ係
ハラズ一作秋以來袁政府ニ疑ハルコトヲ恐ル、為メ邦人ニ面會スルコトヲモ避
ケツアリ漢口鑛守使杜錫鈞及湖北第一師團長石星川ノ兩名ハ我邦ヲ留

(3)

學生ニテ從來我ニ對スル感情頗ル良カリシが一昨年以來邦人ニ面會スル
コトヲ避ケツ、アリ殊ニ杜錫鈞ハ作青漢口暴動之際ニテ暴徒ヲ煽動シテ
邦人ヲ激怒セシメタル疑アリ 他は各省ニ於テモ如キ例ハ頗ル多シ之
が爲メ我商品ノ支那ニ對スル賣込及小利權獲得ハ頗ル困難トナレリ
我對支貿易が近來大速度ヲ以テ發展シ来リシ主因ハ兩國相距ハ近ク
我支鐵ノ発達及我商家ノ努力ニ依ルト雖凡我商人が通商地外ノ田舎
ニ迄侵入シテ支那仲買商ノ奸謀ヲ看破シ且ツ真事務ノ一部ヲ奪フニ
ハ確ニ獨ラ凌駕シタル一因タラズニバアラズ然レニ袁政府ハ各省ニ訓令
シテ邦人ノ旅行スル者ハ地居者ニハ必ズ一名乃至數名ノ密偵ヲ隨行セ
シメ名義ハ保護ト称フルモ其實緯々ノ奸謀ヲ弄ビテ邦人ノ行動ヲ
妨害シツ、アリ
支那ハ他國ニ比シ官商至ニ相連絡スル國柄ニシテ上海ヲ除ク外ハ各地ニ於
ケル商務總會ト官憲トハ頗ル親密ニ交際シアリ而シテ袁政府ハ巧ミ
ニ各地商務總會ヲ利用シテ我貿易ヲ妨害シツ、アリ
即チ袁政府ハ我利權ノ獲得、官衙衙ノ賣込、普通貿易等ニ對
シテ各地ニ亘リテ妨害シ時ニハ「ホイコット」ヲ煽動スル者ナリ 余ガ支那ニ
在ルハ三年間ニ於テ現今ノ如ク我經濟ヲ發展ヲ妨害セラル、ノ憂シキヲ
見タルコトナレ

其二、袁が近年ニ於テ我軍事的發展ヲ妨害シタル事項ノ概要

對支交渉第五項中ノ支那兵器製造及我兵器賣込ニ関スル事項ハ左ノ理
由ニ依リ我邦が將來ノ戦争ヲ準備スルニ多ク極メテ必要ナル條件ナリ

我鉄、亜鉛、アニチモニー、兵符、彈藥等ノ製造事業ヲシテ平時
大ナル儲力ヲ得タルハ是非國外ノ需用ニ應ゼサル可カラズ 國外ニ於
テハ支那が第一ノ需用者ナリ

我ノ用ニキ鉄、製鉄用石炭、亜鉛、アニチモニー、等ノ鑛物ハ是

支那産ヲ用テラ要じ是が為ニ戦時ニ於テハ當ニ兩國間ノ交通權ヲ掌
握スル必要アルミナラズ鐵山及支那内地交通ヲ確定ニ守備スルノ必
要ヲ生ズルヤモ計ラレタ守備ノ為メ一時支那製造ノ兵器彈藥ヲ利
用スルコトヲ得バ我ニ頗ル有利ナリ

支那兵器製造が發達シタル場合ニ至ラバ戦時ニ於テ兵器製造ヲ我國
利用スルト敵國が利用スルトハ我國ノ受クル利害頗ル大ナリ

袁政府ハ近年我兵器ヲ購入セズ全ク独逸製造ノミヲ購入セリ又大正三年六
月北京陸軍部ハ独逸ヨリ二十五萬万マルクノ借款ヲナシテ兵器製造ノ器
械ヲ購入シ且テ技師ヲ聘シテ大兵器製造所ヲ設立スルコトニ決定シ其位置ヲ
独逸ノ熱力カ範圍タル山東省德州ト河南省道口鎮トニ選定シ漢陽兵工廠現
辦劉慶恩氏ヲ器械購買委員ニ任命セリ 今氏ハ今年八月初旬上海ヲ出
帆シ秘國ヲ經テ米國ニ渡リ其後丁抹ヨリ独逸ニ入リ彼ハ昨夏北京ニ歸來
セリ當時我國ハ既ニ山東省ニ於テ熱力カヲ得タルヲ以テ北京政府ハ更ニ山東ヲ距
コト遠キ河南省望都縣(鄭州西方)ヲ選定シテ大兵器製造所ノ位置トナシ昨秋
ヨリ家屋ノ建築ヲ始メ現今略々竣工シタルモ独逸ヨリノ器械未だ着セズ北京
政府財政ニ困難スルヲ未だ工場ヲ開クニ至ラズ將來歐洲戦争終熄シ独逸が勢
力ヲ恢復スルニ至ラバ袁ハ必ズ其力ヲ藉リテ之ヲ創立ス可ク独逸モ亦極力運動
スルナラン

(4)
未來ノ戦争ニ於ケル支那軍隊ノ價值ハ恰モ歐洲戦争ニ於ケル土耳其軍ノ如ク独
逸が平素素數多ク將校ヲ生耳古ニハ其軍隊ヲ訓練シタル關係アリシヲ以テ
戦ニ臨ミ土耳其軍ヲ利用シ其力ヲ藉リタルカニ半島ヲ領有スルニ至レリ歐洲戰
争終熄ノ時ニハ独逸ハ必ズ其方法ヲ支那ヨリモ及ボスニ及ビ獨逸將校
ヲ聘シテ其軍隊ヲ訓練スルナラン 現ニ武臺ニ在ル陸軍豫備學堂(中央幼年學
校)ハ近來独逸式操練ヲ採用セリ前項ニ述ブルが如ク我國ハ戦時ニ於テモ兵器
彈藥ノ原料ヲ支那ヨリ輸入スルニ必要アルヲ以テ平時ヨリ支那軍隊ニ親近戰

時之ヲ利用スルコトハ、本末ノ懸絶ノ為ニ極メテ重要ナル事項ナリ。然レモ袁氏
治者以上ノ大目録ヲ達スル難シ

其三、我國外倒底袁親近スル能ハズ。彼我ハ永久ニ相敵視ス可シ。
邦人ハ概シテ袁氏ヲ憎惡スルコト甚カシ。殊ニ帝制問題出頭以來憎惡之念
益々増カシ我新聞紙ハ殆ド毎日帝制反對ノ論議ヲ掲載シ我政府ニ逐
ニ警告ヲ發スルニ至レリ。又雲南獨立スルヤ我新聞紙ハ概シテ大ニ之ヲ歡迎
スルモノ、如ク各州ノ反袁情態ヲ精細ニ棒大ニ記述シ之ヲ鼓吹スル傾向アル
カ如シ是等ハ皆我國民ノ赤心ヨリ發露セル熱情ナリ。革命黨ハ我邦内
ニ在リテ動亂ノ計画ヲ為シ過日上海事變ニハ邦人ノ之ニ參與スルモノアリシ。而
軍事ニモ邦人ノ參加セル者アリ。聞ク此ノ如ク袁世凱一生ノ大事タル帝位ニ關シ我
政府ハ警告ヲ以テ反對シ我國公ハ拳ツテ之ニ反對ナル言行ヲ發露シテアリ
豫ラヨリ我邦ヲ嫌厭セル袁氏之ヲ見テ大ニ憤然シ恨ミ骨髓ニ徹シ永久
我邦ヲ仇敵視スルヤ必セリ。袁ノ軀股タル帝制派及大官連モ亦從テ於テ
親族親戚ヲ主謀トスル者多ク。今四ハ我政府及我國民ノ為メ彼等ノ地位ヲ
危フシムルヲ以テ將來ニ層層我邦ヲ嫌厭スルヤ必セリ。
右ノ如クナルヲ以テ我ト袁トハ永久ニ相敵視スベク。實業家某々等カ稱スル
此際袁政府ニ借款ヲ與ヘ彼ト提携セトスルカ如キ企圖ハ倒底実行シ得可
キモノニ非ズ。

其四、帝制發表後ノ善後策ヲ如何ニスルヤ

此問題ハ既ニ前二回ノ意見(雲南獨立ニ付キ對袁急務)ニ詳論セルヲ以テ之ヲ重複
スルヲ好マサルモ我政府ノ方針未だ定マラズ。又間ニモ異論者アリト聞キ強イテ其
要ヲ再説セシ。
我政府當局者ノ意アリテ袁スルニ雲南獨立各省不穩ノ報ヲ得テ大ニ我豫言
通中ヲ誇リ。各省平定スル迄ハ更ニ第三第四號警告ヲ發シテ帝制ヲ
延期セシ人。是ヲ以テ警告ノ目的ヲ貫徹シ得ルモノト解スルカ如シ。然レモ袁政

府に既ニ第一等ニ警告ヲ進視シタリ其後袁政府ハ各國ニ通牒シテ要
索事變ノ爲メ帝制ヲ延期ス(即チ當年中決定スル迄ニ即位ス不意)ト稱ヘ
タリ而シテ袁ニテ是レ當年中決定シ得ニカ(平定シ得ル公算多シ)他ノ各省
ハ風ヲ靡ニテ袁ノ壓制ニ服スルヲシ(オノオノノハ絶ハサル可キ)此場合ニ於テハ
美露ニ若クハ利益ヲ收メ帝制承認ニ傾ク可ク我邦トテ支那ガ平定シ動
乱ノ慮ヲ無キ以上袁政府ニ對シテモ美露佛意ニ對シテモ帝制ニ反対スル理由
盡キリ以テ遂ニ之ヲ承認スルノ不得ニ至ラン果シテ然ラバ我邦ハ袁及帝制
派ノ恨ヲ買ヒタルニモテ何等ノ利益ヲモ收メ得カルニ非ズヤ
我々實ニ家室々等ノ縁ウル袁ノ窮蹙ニ福ナリタリ今日ニ於テ彼ニ借款ヲ與
ヘ利權ヲ收メ收ムルモノハ第一大爲ノ解セサル愚論ナリモ政府ノ所謂目的
貫徹ナシニ此レ我國ノ利權ヲ收メ得ルモノナリ却ツテ利益ナルニ非ズヤ我々政府
當局者ニテ是レ斷テ斷テ人措置ヲ取ルノ勇氣無クシバ余ハ寧ろ口實業家ノ愚
論ヲ採用セラレントスルヲ望マン
袁ガ帝位ニ登リタル時ニハ彼ハ必ズ前項(其一、其二)ニ述ベタル如キ手段ニテ
一層激烈ニ我々袁氏ニ妨害スベシ然レカモ其時機ハ政戦結了シ美露が支
那ニ於テ我邦ト經濟的ハ競争ヲ開始スル時ニテ我邦運命ノ岐ル所ナリ
袁ヲ倒スモ再ビ第二ニ袁ヲ生カト云フ論者モアラシ然レバ第二ニ袁ハ第一ノ袁
ノ如ク奸策ヲ用リ支那全國ニ亘リ我々袁氏ヲ妨害スルノ勢力智力及組織ナ
ル惡感情ヲ有セサルヲ然カモ我邦ハ袁ヲ倒シタル後ニ於テ第二ニ統治者ヲ
擁護シ其間ニ於テ権利ヲ利權ヲ收メ得ルニ非ズヤ
歐洲戰後ノ媾和會議ヲ思ハシ多シ彼等列國ハ凡カニ半島、地中海等ノ自
國ノ興亡ニ關スル大問題ヲ審ウガ爲メニ忍ラズ支那問題ニ熱中スルヲ能ハサルニ
今日ハ對列強國係及對支那民族關係ニ意ヲ倒スノ絶好機會ニシテ我邦
私力ニテ袁氏金銀ヲ奪取シ帝制ヲ廢止スル容易ニ其目的ヲ達スルコトヲ得ベ
シ我々當局者中ハ胆ナル者ハ此ノ如キ手段ノ列國ニ暴露セシムル慮リ我法規

ニ抵觸スルコトヲ恐ル、ナラン然レモ是レ微々然ル事ニテ独逸ノ一領事カ一商人が容易ニ爲シ得ル仕事ナラズヤ殊ニ現今ノ如キ重大ナル時機ニ於テ人目々ナル法規ニ拘泥スルヲ要セザルニ非バヤ

其五、本二月ハ千歳一週ノ故ハ戦乱中ニ於テノ最要時機ナリ

讀者ヲテ余、此ヲ信セシメン爲メ左ノ事ヲ一言セシ

余ハ前北支那ニ於テ多年支那軍隊間ニ生活シ日々支那人民ニ接觸シ其内情ヲ知悉スルヲ以テ動乱ニ際シ西軍ノ勝敗ヲ豫言スルハ最モ適當

ノ事ナリ

義軍ノ若シモ匪團長張敬堯氏ハ支那人中ニ傑出セル勇者ニテ且ツ軍事學ノ素養アリコトハ既ニ前章見(對支業務)ニテ詳述セリ即チ快師ハ雲南軍ニ對スル豫敵ナリ快師ノ先頭部隊ハ宜昌ヨリ萬縣ヲ排シテ急進シ去ル二十三日頃ヨリ陸續重慶ニ到着シテアリ然レモ其後續部隊ハ船舶毎夫ニ欠乏セルヲ以テ大ニ行動ヲ遲延スベシ全師團ハ重慶到着ハ三月分月中旬ナリシ而シ四川將軍陳宦ノ率ユル北軍混成旅團ハ多分第七師ト協同作戰スルニ至ラン

西軍ノ進戦ハ何レナリヤ判斷ニ當リト云ヒ既ニ第七師が重慶ニ到着シツ、アル以上、重慶縣駐屯ノ四川軍隊ハ恐ク雲南軍ニ降ラザルヲ從ツテ雲南軍ハ重慶ヲ占領スル能ハザラン此ノ如クシテ西軍ノ進戦ハ本月下旬カ末月上旬ニ瀘州附近ニ於テ開カレカト奉セラル

雲南軍ハ將校ノ軍事學識、兵卒ノ素質、訓練、兵器彈藥等悉ク袁軍ヨリ劣リ山砲多キモ実彈射撃手演習ヲナサザリシヲ以テ其使用頗ル拙劣ナルヲ殊ニ山地戰ニ必要ナル機関點ニ欠乏ス故ニ他ニ重大事無ク且ツ我邦が彼ヲ暗助セザル以上雲南軍ニ勝算ナク而シテ來ル三月ハ其勝敗ヲ決スル時機ナリ

廣東廣西ノ二省ハ兵器彈藥金錢ニ欠乏ヲ訴ヘツ、アルヲ以テ我邦が彼ヲ

暗助セザル以上容易ニ起ツ能ハズ
揚子江沿岸ニ施テモ人心ハ日々衰ニ叛キツマルモ北軍約八個師團ノ大兵カ駐屯
スル以上容易ニ事ヲ舉グル能ハズ又其北軍ヲ變心セシムルコトモ頗ル困難ナリ
以上ノ状態ナリ以テ我邦カ革黨ヲ暗助セザル以上衰ハ雲南及各省ヲ平定
シ帝位ニ即キ得ルノ公算ナシ
然レモ我國ヨリ其ノ藩籬金銀ノ若干ヲ供給スルコトヲ得ハ民心ハ大ニ衰ニ
叛キツマルヲ以テ直ニ蹶起スベク廣東廣西ニシテ立メバ袁政府ハ益々
財政困難ニ陥リ揚子江畔ニ在ル北軍中ニモ變心スル者ヲ續出シ此ノ如クニテ
容易ニ衰ヲ倒シ得可シ
然レモ我政府モテ活ニ何等決ス所無ク遂ニ雲南軍ノ主力カ撃テ破セラルニ至
ラシカ他ノ各省人民ハ大ニ衰ノ威力ヲ恐怖スルニ至ルヲ以テ其後ニ於テ縱令我
邦暗助ヲ興フルモ蹶起シ得非ナラシ故ニ我政府ハ遲クモ本月中
旬ニ決ム國ノ革命黨暗助ノ準備及実行ニ關スル時日ヲ得テ之ヲ完全ナラシ
ムルヲ要ス是余ガ本月ヲ以テ最要時機ト稱フル所以ナリ
即チ本月ハ我邦前途盛衰ノ分岐点ナリ内閣諸公ノ猛斷ヲ望ム
(終)

(秘)

支那近狀報告目次

五月廿五日

第1項	第2項	第3項	第4項
(一) 上海近信 (四月二十五日發)	在上海某氏	一頁	
(二) 支那革命近狀 (五月十日發)	某婦某氏抄	四頁	
(三) 山東討袁軍近狀 (五月十日發)	在山東某氏	八頁	
(四) 支那時局收拾、閑人談想 (五月十日發)	在湖南某氏	十頁	
一 北派、内容	二 南派、内容		
三 緒論			
(以上)			

大正五年五月廿五日 國民外交同盟會

支那近狀報告

(二) 上海近信 (四月二十五日) 某氏來

譯者時局、進歩、共、益々、動、事、存、候。其、地、對、着、以、泰、當、方、面、ノ、狀、況、一、向、進、展、セ、ズ、傍、觀、者、ヲ、シ、テ、甚、々、期、ト、カ、レ、カ、ラ、シ、ム、ノ、有、之、候。之、ト、云、フ、モ、畢竟、北、京、政、府、が、此、處、大、事、ト、シ、テ、進、展、シ、ル、ハ、必、シ、テ、低、等、ニ、取、リ、テ、ハ、上、海、ハ、興、敗、ノ、天、王、山、ニ、シ、テ、上、海、ヲ、一、維、持、シ、行、ケ、バ、現、狀、ヲ、持、續、ス、ル、コ、ト、強、ク、困、難、ナ、ラ、ズ、罷、り、達、ハ、大、勢、變、回、ノ、機、會、到、來、セ、ズ、ト、モ、限、ラ、ズ、ト、考、ヘ、居、ん、が、如、ク、之、ト、又、一、旦、此、地、ヲ、失、ハ、ン、カ、事、方、ノ、形、勢、ハ、急、轉、直、下、シ、テ、表、ノ、地、位、ハ、愈、々、支、持、シ、得、ず、ル、事、ト、ナ、ル、ハ、キ、コ、リ、之、ト、對、シ、表、派、ハ、一、通、リ、ノ、カ、ノ、入、方、ハ、無、之、候。

加之英國側が極力北方ヲ援助シ南方ヲ壓迫シ居ルコトモ、當地ノ獨立、至大ノ妨害ト相成居リ候。但シ英國側ノ者モ上海ガ失ハザレバ北方勢力ノ挽回必ラズモ不可ナラズ、隨、テ、再、出、表、ノ、下、ニ、統一ヲ圖、ラ、レ、得、ベ、キ、モ、ノ、ト、思、フ、居、ん、が、如、ク、稅、關、警、察、電、信、局、等、諸、機、關、ヲ、總、リ、有、ラ、ズ、ル、利、害、ヲ、利、用、シ、テ、反、表、派、ノ、驅、逐、シ、廢、心、シ、テ、其、ノ、實、ヲ、收、メ、テ、其、其、亂、暴、ヲ、加、減、是、迄、ノ、無、キ、所、ニ、候。

斯ル場合ナルハ、俄ラズ、反、表、各、派、ノ、向、ニ、一、致、力、ヲ、致、シ、却、テ、反、表、派、ノ、情、シ、ツ、アル、事、亦、其、多、ク、伸、ビ、ザ、ル、一、原、因、ト、存、シ、候。當、地、ノ、反、表、派、ハ、大、別、ス、レ、バ、急、激、派、ト、穩、和、派、ト、ニ、分、レ、更、ニ、小、別、ス、レ、バ、大、カ、ハ、八、ノ、急、激、派、ト、シ、ル、ベ、シ、候。急、激、派、ハ、云、フ、迄、モ、ナ、ク、純、華、會、黨、ニ、シ、テ、其、區、域、ヲ、リ、云、ハ、孫、文、ノ、宣、言、ス、ル、陳、其、美、一、派、ト、黃、興、ニ、劉、恩、澤、キ、劉、永、達、一、派、ト、ナ、リ、此、外、別、ニ、新、東、亞、漢、人、鳳、一、派、ヲ、リ、テ、前、ニ、派、ト、全、然、別、當、ノ、計、畫、ヲ、立、テ、着、々、進、展、中、ノ、操、見、受、ケ、ラ、レ、候。

大正五年五月廿五日記聞第二部續完

当地ニテハ目下ノ處概シテ革命党ノ勢力カニ候。陳其美ハ往年滬
軍都督トシテ上海ノ軍政ヲ掌握シタル關係上其面目ト掛ケテモ何トカ一
仕事ヲサネハナラヌ故目ト在リ大ニ濫播キ居ル模様ナレバ左ナキ如ク
微々タル革命党ノ分子ガ一方動永遠ノ為メニ分割サレ兩々相軋轉シ居
ル模様ナレバ其勢力ハ益々萎蕤シツアル様見受ケラレ候。併シ支那ノ事
ハ常ニ意外ノ變化ヲ生シ易ク先日迄兵力モ金力モ皆無シテ一掃
來ノ書生ト見做サレ居タル韓恢ガ西部江蘇ニ於テ大ニ飛躍シツ、
アルガ如ク陳等モ何時如何ナル活動ヲ始メストモ限ラズ中々輕視ハ
出来ズ候。

(2)
譚人鳳ハ帰滬勿々ニテ未カ大ニタル發展モ出来ザル模様ニ候得
共同人生得ノ叛骨ト同人間ニ於ケル潛勢力トハ直チニ儕輩ヲ凌
壓シテ高ク頭地ヲ攸カントシツアル模様ナレバ畫策宜シキヲ得ニカ
当地ノ革命的勢力ハ或ハ譚ノ節度ヲ受ケ隔ミナラズト被見受候。
併シ上海ノ反袁的勢力ハ目下熾カニ穩和派即チ旧國會議員
派ノ中ニ固メラレ居ル有様ニ候。唯々其勢力ノ大ニ伸ブベリニテ
充分伸ビ得ザル所以ノモノハ前陳ノ如ク北京政府ガ極力当地ノ文
時ニ努メ英國側ガ大ニ之ヲ援助スルガ為メニシテ其又ハ一半ノ責
任ハ彼等ノ間ニ幾分分派シ生ジ動モスレバ互ニ相嫉視中傷
スルガ為メト存シ候。仮令ハ民意報ノ擴張伊ノ如キハ萬分以テ先
入進就中田官吏出シ者ヤ地方紳董連々信用ヲ有シ一面ハ事業
ミハカチカラザル便宜ノ地位ニ在レバ實際際運動ノ中堅ト爲ルベキ
青年客氣ノ輩ハ悉ク中華日報ノ益體者ノ及ビ時事新報ノ殷汝
驤等ノ纏ラレテ過半ノ便宜ヲ致キ而シテ各々殷ヤモ亦々青年
ノ大勢力ヲ有シテカラ比鞍的ニ年長者間ニ信用薄キ有様ニ候。
故ニ彼等ニシテ眼前ノ大敵ヲ目多ク暫ラク隱忍シテ互ニ相包容

セシカ此三人ノ團結ヨリテカニテモ相当ノ仕事ハ為シ遂ゲラル、
然レモ依然ハ利害ノ感情ニ捕ハレテ内輪喧嘩ニ此レ日モ足
ザルハ残念、次第ト存候。

況ンヤ当地ハ唐紹儀、伍廷芳、汪大燮、湯化龍ノ如キ長老モ
アリ一方ハ張謇等、率ニ地方有力者モアリ今日彼等ノ総テカ至
ノ思想ヲ抱キ居ルハ幾ナキ所ナルガ故、各々段々乃至孫洪伊等
今ニ段々高直ニ着眼シナバ當地ノ獨立運動ハ更ニ數段ノ蒸境
向フニ相違ナシト彼等候ニ去リトハ又ハ残念、次第ニ候。

併ニ袁ハ江蘇、吳江ノ獨立アリ、而シテ今又ハ丹陽、常州、無錫等
動搖アリ蘇州ノ形勢亦頗ハ迫リトモ傳ヘラル。斯クテ上海ヲ取巻
各地が一斉ニ狼火ヲ舉グルニ至レバ上海獨リ大勢ニ抗シテ安ん
ザルハ其時ハ當地ノ形勢モ急轉直下スルナキヲ可ク不保候。

(3)
時ニ北方派ノ當地支持ハ實ヲ洗ヘバ依然金カノ關係ナレバ北方財力
ヨリ盡キタルガ最後當地ノ支持ハ全ク困難ト可相成候。今日ニテハ金窮
トハ云ヘ未タ中華銀行ヤ交通銀行等其手中ニ在ル事故未タ續リ
リノ絶對的不可戰ト云フハ非ズ併シ夫レモ程度問題ニシテ此處
ケ月モ経過セバ金窮境ニ陥リ深ク當地ヲ顧ル能ハザルニ至ル
ント存候。現ニ今日當地獨立ノ出表ザルハ軍警ガ依然北方ノ手
中ニ在ルハ爲メ候。併シ之ハ南方ノ買収價ヨリモ常ニ北方ガ買収價
カ更スルカ爲メ過ギズ從テ北方ノ財力愈ヨリ窮シテ止ル
カ更スル手ノ競リ落サルノ時ハ即チ支那ノ天下山ガ反表派
掌裡ニ帰スルノ時ニ候。即チ支那ノ局面ハ之ヲ一徹落トシテ
轉直下スルニ至ルナシト存セラレ候。幸々。

(三) 支那革命の近狀

葛野素珍抄

會友某氏先之支那革命ノ近狀視察ノ爲メ上海ニ抵リ、帰途山東ニ立寄リテ彼此其實況ヲ調査シ最近情勢セラレタリ。今其談話ノ要領ヲ摘記シテ參考ニ供ス。

(4) 一、數月前革命黨が最良ノ勢力ヲ以テ其勢力ヲ發展シツアル。際ニ於テハ馮國璋張勳ヲ始め各省都督中ノ多數ハ何レモ其去就ニ迷ヒツアリ。當時革命黨が彼等ヲ相當ノ勢力ヲ備ヘ運動スルヲ得セシメバ、是等都督連ハ何レモ革命黨ニ響應シテ其向背ヲ決セシヤ殆ト疑ナカリシ所ナルハ拘ラズ、革命黨ノ運動費莫高ノ如クナラス(今日迄上海方面ニテ醗集消費シタル運動費莫高約三十萬圓ニ過ギス)且ツ其同志間ノ内訌ノ爲メ首尾一致ノ行動ニ出ル能ハズ、又々党内數派ノ一部ニ於テ日本ノ行動ニ狐疑ヲ生ジテ表裏ヨリ交渉ニ乘リタル者頗有リ。然ル者アリシ等ノ關係ヨリ其氣勢甚チ昂ラズ躊躇逡巡ノ向ニ於テ一方北京ニ於テハ段祺瑞徐世昌等ノ再起ニ次テ段内閣成立ニ致シ其緣故取モ淺カラザル馮國璋其他各省將軍ニ對シテ百方勸説スル所アリ各省將軍等モ亦々漸ク革命黨ノ勢力恐ルハ、是ラザルヲ憂知ルニ至リタルヨリ一面革命黨ト聯絡ヲ存シテ其意向ヲ損セザラシム他面又々段祺瑞ト聯絡ヲ取リテ巧ミシ其兩面ヲ操縦スルニ至ラシム此ニ於テ革命黨ト表裏凱トノ向ニ動カス可カラザルヲ三黨ヲ生ジ革命黨ヲミテ袁世凱ニ對シ直捷抵抗ノ衝ニ當ルヲ得ザラモ亦三黨ハ其間ニ立チテ隱然之カ障礙ヲ爲スノ形勢ヲ馴致スルニ至レリ。蓋シ當時革命黨ノ援助者ニミテ充分ノ運動費ヲ供給シ受中ノ有力者ヲミテ自由ニ其手腕ヲ振ハシムル法ヨリ出デシ大局ヲ制スルコト左シテ困難ナラザルヲ得ベカリシニ其援助ノ方針ヲ徹底セシムルヲ得バ今日ノ狀態ニ

ラシメタルハ其ノ遺憾ナリ。

○二、北京政府ノ狀態頗ル窮乏ノ地ニ在ルハ云フ迄モナキ所ナルガ革命党及ハ馮國璋等ノ實力モ亦外藩弱ニシテ馮國璋其他各省將軍等ハ其兵力ヲ擁スルト地方ノ收入ヲ有スルトヨリ僅カニ其勢力ヲ保テシテ過ギズ。革命党ト互リテハ獨立各地ヲ除ク外兵力ナク又々收入亦必ヤナク漸ク各地有ル餉金ヲ待ツアルノミテ満足ナル運動ニ從事スルヲ得ズ從ツテ革命党ハ暗黙ヲ以テ革命ノ風潮ヲ邊起シツ、アリ。

三、馮國璋ト革命党ト向ハ暗黙ノ妥協アル如ク、革命党ハ馮ノ勢力内ナル上海附近ニ於テハ其党員ヲ密動セザルヲ約シツ、アリト傳ヘラル。是ニ對シ革命党ハ〇〇ノ退後海兵が最近吳淞附近ニ於テ短艇ニ乘ビ軍艦奪取ニ赴キ失敗シタルハ革命党が同海兵等ヲ一旦捕入レタルニ拘ラズ此軍艦ノ為メニ不用ニ留シ歸國セシムル事トナリタル抗議(一方、テハ〇〇回〇〇ヨリ差止メラレタルモモルトノ説モアリ。革命党附記)革命党實其等ノ密動の指図ニ出デタルモノナリ。蓋シ革命党ハ斯ノ如ク上海方面ニ於テ馮國璋ヲ頼ミテテヲ為スノ狀ヲ表シ居ルハ畢竟實力上之ニ抵抗スルヲ不利トシ勢ヲ隱忍シテ大局ヨリ其勢力ヲ控制セント期スルニ在ルモノ、如ク、馮國璋モ亦之ヨリテ革命党ノ反抗ヲ避ケ他面ニハ各省將軍等ト此今歲一遇ノ機會ヲ利シ第三党ニ懷リテ依リ自家ノ地歩ヲ開拓セシムルヲ計通シツ、アルヤ疑フ要セズ。

(5) 袁世凱ト革命党ト向ハ馮國璋等第三党ノ障壁ヲ形成シタル今亦之ヲ革命党ノ一派が山東省ニ開始シタル行動ハ即チ馮國璋等亦三党ノ障壁ヲ倒リ越シテ袁世凱勢力ノ中腹ヲ突ケルモノニシテ誠ニ地理ヲ得タルモノナリ。同地ニ行動セル革命党ハ孫文部下ノ居正一派所謂土著派ト稱スル一派トノ提携の成レル者ニシテ統帥其人ヲ得ズ實力亦頗ル懸念ナキアラスト孫氏要スルニ支那ノ風潮ハ強ナリ革命党

以テ判ス可カラザルモノアリ、彼等ニシテ約半ケ月ヲ支フルヲ得シカ四方之ニ屬
舊シテ立テ濟南亦ハ收ムルニ難カラザルベク、然ルハ天下ノ形勢ニ有テ重
大ナル變化ヲ興フルニ至ルベシ。是レ其メ興味アル問題ナリ。

五 南北各派一般ノ勢力ハ革命黨ト云ハズ宗社黨ト云ハズ何レモ革命
固ナル基礎ヲ有スル者トアラズ。吾々ハ時々ノ風潮ニ雷同響應應ニテ自然
ノ勢力ヲ伸縮シツ、アルコト恰モ砂漠ノ風動ニ其丘陵ヲ變轉スルニ要
ナラズ。而シテ各省將軍軍閥大官連ノ去就ノ如キモ目的ハ一ニ其地位ヲ擁
護及運送クハ其父ニ討ヘズテ權勢ノ地位ヲ固執セント期スルニ在リ。
其兇惡の關係ト政治的主義主張ノ如キハ一時期ノ方便ニ過ギス事
ヲ囑喝、權謀、姑息ヲ以テ始終シ自棄的ニ積極行動ヲ取ラントスル者
ノ如キハ下ノ如シ。此際何レノ党派ニモセヨ猛然起ツテ出色ノ勢力
ヲ示スモノアラシカ、天下ハ糾然トシテ之ニ響應スルニ至ルベシ。彼ノ革命黨ノ
人々自前時表ノ大目的ヲ前控ヘナガラ討表ノ目的ヲ同スル宗社黨
ノ蹶起ヲ恐レ或ハ各省將軍等が武力ヲ有シナガラ革命黨ヲ憚リツ
、アルが如キハ以テ其間ノ消息ヲ窺フニ足ルベシ。

六 今ヤ文部ハ前途ノ如ク要オ三分ノ形ヲ以テ其勢力ヲ割リツ
、アリ。此間ニ於ケル袁世凱ハ其地位漸次傾頹ニ赴キツ、アルハ争フベ
カラズト云々然カモ各党派暗闘ノ間、或レテ他傷、其地位ヲ支持セ
レツ、アル。觀ナキニアラズ。唯ハ彼が政治的六腑地ノ地位、在リカ
ル、其脚下ニ於テ再ハ設謀毒ト軌轉ヲ乘サントシツ、アル等ノ事情ニ
考フレバ其失脚或ハ遠カラザルベシト云々彼レ亦タ尋常先驅ノ類、
アラズ況ニヤ其の兵權ヲ手放サルニ於テハ之が排作ノ目的ヲ達ス
ルコト前途ニ遠シナリト云フベシ。

(八) 七 目下各省ト中央政府トノ關係ハ殊特關係ヲ有スル少許ノ地
方ヲ除キヨリハ北京ニ對シテ政費ヲ送納セズ却テ其補給ヲ中央

(7)

要求セントメントアリ。從テ天下ノ影響ヲシテ漫然今日ノ狀態ニ推移セシ
 此ノカ、一種ノ變體ヲ成セル斯邦ニ在リテハ下等動物カ首尾ヲ中斷セシテ高
 等動物然シテ生活スツ、アルカ如ク各地ハ各分ノ間其現狀ヲ維持スル強ナ期シ
 難キ、アラザルベシ。此ノカ後見、地位ニ立メントスルモノ、徒々袖手傍
 觀スルアラシカ、其目的ヲ達スルコト百年守株ノ愚ヲ貽スに至ルベシ。
 ハ、之ヲ要スルニ對テ政策ノ第一期事業ハ表世凱ヲ排斥スルニ在リ。
 然ルニ其現狀カ未カ表世凱ヲ倒ス、至ラズシテ早クモ漫性的症狀ニ
 屬シシメタルモノニシテ、之ニ對スル政策ハ排斥受各派、テ充分ノ補助
 ヲ與フルト同時ニ帝國政府ヲシテ正面ヨリ彼カ引退ヲ勸告セシムルニ在
 リ。而シテ軟カカシバ強カラシテスルモ斯レテ其趣意ヲ徹底セシムル可
 ラズ。是レ支那ノ漫性的ナル時局ヲ打開スルト同時ニ帝國ノ威信ヲ支那
 人ニ示シテ將來ニ備フル、最モ緊要ノ手段ナリ。若シ夫レ表世凱引退後
 ノ支那ニ於テハ一時群雄割據四分五裂ノ狀態ヲ呈スベシト云ハズ、如キハ決
 テ支那ノキノ事ニアラズ、我邦ニシテ買辦ナル方針ヲ以テ之ニ臨マバ其混
 亂ノ狀態ハ對テ問題解決ノ目的ヲ貫徹セシムル上ニ於テ最モ有効ナ
 ル結果ヲ生スベキモノナルヲ信ズ。
 九、因ニ支那ノ大局ヲ觀察スルニハ山中ノ人山ヲ見ル時ハザルト同シ
 彼地ニ在ル者ハ其波頭スル一面ニシテ觀察ヲ集中スル為メ其觀察ニ
 自然偏頗ヲ生ズルヲ免レズ。在東京觀察者ノ方却ッテ要領ヲ得タル
 觀察ヲ為シツ、アルハ余カ今固ノ觀察、於テ時ニ感ハル所ナリ。

(三) 山東討袁軍ノ實情 (五月十日)

山東革命軍モ五月四日夜濰縣ヲ攻撃シタルモ反對ノ官兵ノ機關銃、砲、及鐵々迫り捲リテ負傷者十名ヲ出シ候。自下休戰狀ニ在リ、而シテ革命軍ノ兵力ノミテハ到底攻取ノ見込ナシ。自下張師團長ヨリハ獨立ノ條件トシテ攻撃ヲ中止ヲ望ミ來リ、革命軍ニテハ獨立スルニセヨ其或モ一切ヲ革命軍ニ引渡シ居正ノ下ニ一致ノ行動ヲ採ラシコトヲ同意シタルモ張師團長ハ革命軍ニ武裝ナク且ツ千人足ヲ不ノ逆勢カナルヲ破リ居ル事トテ居正ノ下ニ居スルハ考ヘ物ナリトアルニテ拒絶シタリ。張師團長側ニハ芝罘ヨリ砲四門ト兵二千ヲ應援隊トシテ送り來リシハ一層力ヲ得タル者ノ如シ。元來張師團長ノ志ハ日本軍ガ或ハ攻撃ニ援助ヲ與フルナキカ在リ。之ガ爲メ革命軍ト交渉ノ上戦分後和ノ余地ヲ得ント欲シ其交渉ヲ開始スルニ至リシモノナリシモ、其然ラザルヲ知リタル今日トアリテハ必ズ内訌後進シ居ル事ト存シ候。

張師團長ニシテ居正ノ下ニ降リコトヲ能カズ革命軍ト獨立スルモノトセバ革命軍ハ海濱縣ヲ攻撃セザルヲ得ザル端目トナルハキモ革命軍ハ最早戰門ニテハ攻取スル能ハザルヲシ。此際大砲ノ五六門モ貸與スルモノアリ一軍ニ攻撃スルヲ得ヤシメバ或ハ功成スベキモ自下〇〇〇〇〇ハ坊子旅團長、對シ嚴正中亞立ヲ守ルベシトノ内訓ヲ與ヘタルノ所説モアリ。此後助ハ殆ト望ム可カラズ候。若シ濰縣ニシテ革命軍ノ手ニ落チザラシハ山東革命軍ハ全然失敗ノ帰スベシ候。然ルニ革命軍ニシテ急ヨリ攻撃ヲ取懸ラザルヲ得ザル時ニ當リ、城兵中ヨリ内應者ヲ得ル能ハザランカ、革命軍ト現在セルモ一モ一銃ノ千發許リヤ若カ、寄セ集メ兵位ニテハ其目的ヲ達スルコト難シ六ツケシ。殘念千萬ノ次第ニ候。

(8) 我〇〇〇ハ革命軍〇〇〇一汎ノトニ重キヲ置キ、少シク買ヒ被リ、〇〇一

流、討てしハ頗る輕蔑ノ念ヲ有セシノ形跡アリ。元來〇〇一派ハ山東省
流ヲ中心トセル為メ、武力討伐ヨリモ城内支那兵ノ内應者ヲ造ル様主トシ
テ運動ノ方針トシタリシガ、金ナリ武器ナキアル等、〇〇一派ノ輕みナル所ト
爲リ、一時ハ分離解散ヲ宣明スルノ止ムナキニ至リシ程ナルガ、夫レハ餘リ大
人氣ヲ失フテ〇〇軍某等が仲裁セバ、〇〇派ヨリ幾分ノ武器ヲ分與
シ一方ハ山東革命軍、一方ハ山東護國軍ノ旗ヲ押シ立テ漸ク進出スル
事トシタル次第ニシテ其外見ハ兎ノ角内心ハ全然不一致ノ狀態ニ在
リ。斯クテ〇〇派ノ護國軍ハ〇〇派ノ護國軍攻撃前日、突如トシテ周
村ヲ襲撃シ、(周村ハ官兵不足ナルモ富裕者ノ居住スル處ナリ) 諸モナ
ク手ヲ入レテ其成切ヲ奪ハルヲ得タリ。

海陽ニシテ護國軍兵ヲ征服シ得ルニバ革命軍ノ戰鬥員ハ分散
シテ各自ニ據守ヲ計ルベシ、山東革命軍ハ一變シテ山東護國軍ト化
スベシ候。

革命軍ヲミテ實ニ戰鬥ヲ以テ進取ヲ取リ清軍ヲ陥レシメントセバ
機關銃や大砲位ヲ備ヘシメザレバ困難ナリ。然ラザレバ〇〇兵が暗夜
ニ襲撃セザレバ到底物ミナラズ候。

若シ山東革命軍ニシテ失敗スルハ孫文最初ノ旗號が、疵
が附ク者ニシテ他地方ニ於ケル孫派ノ清長ニモ損スルコトニ在リ候。

去ルニテモ〇〇〇〇〇が初メハ極力革命軍ヲ助ケ此分ニテハ愈々戰
争開始ノ機ニハ幾分、テモ兵力ノ増助ヲ冀フルナランビト云々世人ノ豫測
セシメタルニ拘ラズ近來ノ態度ハ頗る解釈ニ苦ム所ニシテ斯クノ如クシハ
寧ろ最初ヨリ手ヲ附ケザルヲ得策トセザリシカ。畢竟政府ノ方針が腰弱
クナリシが爲メナルヲ被ね候。

(9) 山東革命軍ノ成功如何ハ目下政界ノ情氣満々ナル所柄抑袁ノ大
局上最も重大ナル關係ヲ有スルヲ論スル夫レハ此狀態ニ在ルハ惜ム可ク候。

(四) 支那時局收拾の関スル預想 五月四日附 在湖北會友某氏稿
 袁ハ早晚退位セザルヲ得ザルベク其後、於テ政權ハ北派(後設選)ニ歸スベキヤ。南派(國民黨進歩党)ニ歸スベキヤ。或ハ南北融和スベキヤヲ豫想スルハ我ガ政策上極メテ重要ナル問題ト認ムルヲ以テ茲ニ卑見ヲ呈ス

北派ノ内容

段祺瑞ノ性格タル金錢ヲ愛セズ權威ニ屈セズ高貴頗ル強硬ニシテ大事ヲ決行スル果斷之富ム。然カモ心術公正ニシテ野心無シ(或新舊ニハ段が清末ニ於ケル袁ノ故智ニ倣フト論スルモノアルモ余ハ段ノ性格上此ノ如キ野心無キカト思フ)是レ段が南北兩派ヨリ敬慕セラル所以ナリ。然レ死後ノ意者が餘リ強硬ナルヲ自説ヲ固執シ人言ヲ容レザル傾キアリ。從來段ノ部下ハ段ヲ畏ルコト甚カシク其稟息ヲ窺フノミニテ意見ヲ具申スル者無カリシ。而シテ猶ヤ霸氣アルノ士ハ段ニ容レラレス奔テ馮國璋ニ投スルヲ常トス。又段ハ各省人ヲ偏用スル僻アリテ(省間ハ支那ノ常習ニシテ怪ム足ラザルモ段ハ比較的其シキ者ナリ)彼等安んず人ハ漸次他省人ヲ排斥シ段ヲ益々他省人ヲ容ルハ能ハザラシム。故ニ段ハ平和時代ニ於ケル内閣總理殊ニ大總統タルハ不適当ナルモ袁ニ代リテ安權ヲ掌握シ南派トも世故スルハ無二ノ總理タリ。

新内閣ノ閣員ハ概シテ段ノ後輩タルニ三流ノ人物ヨリ成レルヲ以テ容易ニ統一セラルベキモ段ニ對シテ直言シ得ル者無ク、段ノ秘書タル徐樹錚(前陸軍次長)ヲ以テ日本士官學校出身ノハナ子(か益々權威ヲ振フに至リ遂ニハ段ノ聲譽ヲ傷フに至ルヤモ計ラレズ。

(10) 段内閣が袁ヲ退位セシメ南派トも世故スルノ二大事ヲ成就スルト否トハ主トシテ馮國璋ト相握チシ得ルト否ト依リ決スルナラン。馮段共ニ

表、如天王カリシカ両者ノ性格相異なるノ事ニ衝突ヲ来セリ。馮ハ理財ニ巧ミシ
テ其行爲殷ノ如ク清廉ナラズ馮ハ人ヲ容ルノ雅量アルヲ以テ殷ノ部下中
馮ノ許ニ奔リタルモノ多ク爲メ兩者ノ感情ヲ害スルコト多シ。滿朝時代ニ於
テ馮ハ表ニ事フルト同時ニ滿朝ニモ接近シテアリシガ殷ハ滿朝ニ接近スル
ヲ好マズ且ツ馮ヲ中ニ容れシツアリシ。其他兩者が相融合シ得ルハ現象頗
ル多シ。然レハ馮ハ修養圖説ニシテ老境ニ臨ミタル今日ニ於テハ殷ト争フノ元
来ウ失ヒ彼ハ率直ニ親近スルヨリモ寧ろ殷ト接近スルヲ以テ一身上ノ安全ト認
メ、又當時ニ對シテハ人物徐世昌が兩者ノ融和ヲ勉メツ、アルヲ以テ兩者ハ固ク
接近シテ事ナラン。

新將軍ハ殷が山東武備整頓ニ多ク其功ありし時ニ其功を主タリシガ其後殷
ノ直隸總督ナリシ時ニ其部下ノ要員ト爲レリ。第一次
革命後殷が七十二將ヲ逐テ滿朝退位ヲ迫リタルハ殷ノ發意ニ非カシテ
靳ト容テ容ノ意見ニ基クモノナリ。靳ハ徐樹錚ト共ニ殷ノ家庭ニモ親近シ
アリテ殷ニ對スル熱心ノ忠信ナルベシ。

李將軍(李純)ハ殷が六鎮統制アリシ時其部下ノ聯隊長ナリシ間
係上殷ニ服スベシ。

陸(建章)將軍ハ剛腹ニシテ師ニ難キ人物ナルモ殷が六鎮統制アリシ
時其部下ノ聯隊長ナリシト殷ト同僚ナル關係上ヨリ彼ニ服スルナラン。

王(占元)將軍ハ殷が第三鎮統制アリシ時其部下ノ大隊長ナリシガ一
昨年白狼討伐ニ際シテ殷ト意見ノ衝突ヲ来シ其後殷ニ容レラレザルガ
近日馮國璋ニ親近シツアリ。

張勳ハ馮ト行動ヲ共トスルナラン。

倪(嗣冲)將軍ハ殷が六鎮統制アリシ時其部下ノ聯隊長ナリシト殷ト同僚ナル關係上ヨリ彼ニ服スルナラン。

第二師長孫元良ハ殷ノ甥ナルモ其父親子同様ノ關係アリテ現

袁世凱ハ北京ニ移駐セシメ、袁ノ親兵タル供衛軍ヲ壓セントスモノ、如シ、
其他各師ノ師旅團長老練長等ハ概シテ段ヲ師弟若クハ主従ノ関
係アリテ段ヲ擁護スルトキハ容易ニ北軍ノ全部ヲ統轄スルヲ得シ。
又師唯一ノ財政家ニシテ權者ト富ム梁士詒ハ從來段ノ政敵ナリシモ梁ハ帝
制主唱者ニシテ南派ニ客ラレザルメ一時段内閣ヲ助クルナリ。
袁退位ニ関シ帝制派中段ノ反対スル者アラシモ段ハ大兵權ヲ掌握スル
以上容易ニ彼等ヲ威壓シテ袁ノ退位ヲ断行セシムル事ヲ得バク、同時に
段ノ名聲大ニ榮リ且ツ民心ヲ得ルに至ラン。而シテ黎元洪ハ大總統タル
空位ヲ擁ヒ徐世昌ハ臨時然段ヲ助クルナラン。

二 帝制ノ内容

孫文派ハ血氣ノ士ト富ト雖凡各地ニ於テ他黨ト提携スルヲ孤立シテ華事
ヲ企テトシテ成功シタル事ナシ。上海ニ於テ陳其美等ハ和人某ノ暗助ヲ得
テ大ニ活動シタルモ計畫粗漏ニシテ輕舉妄動ヲ事トシ殊ニ下流社會ヲ煽動
シテ騷擾ヲ爲サシメタル爲メ今や識者及商人ノ嫌厭スル所ト爲レリ。湖北ニ
於テ先キニ蔡濟民次ヤ田桐一派ハ華事ヲ企テタルモ兇戯ニ等シキ
騷擾ヲ事トシタルノミニシテ遂ニ人民ノ恨ミヲ買フに至レリ。山東滿洲
方面亦ヨリ然リ。孫文等ハ亟ク和邦ノ在リテ和邦人ノ知友ヲ今更ニ和邦人ノ
彼等ヲ助ケタル者アルニ係ラズ彼等ヲ適當ニ指導シ得ザリシハ實ニ
遺憾ニシテ將來モ發展ノ見込ナシ。

袁世凱ハ武斷的人物ヨリ進ツ進歩受ト提携シテ事ニ當リタルヲ
以テ稍ヤ成功シタル方ナルモ莫カ米國ニ在リテ局ニ當ラザリシ爲メ該派
ノ行動ヲ遲緩セシメタル感アリ。李烈鈞林虎等ハ未ダ江西ニ侵メセ
バ柏文蔚趙建等ハ未ダ長江畔ニ地歩ヲ占ムルに至ラザルヲ以テ一
大奮闘ヲナスニ非ズンバ北派ト拮抗スル能ハザルベク、戦ニ倦ムル今
日ナレバ更ニ奮闘シ得ルヤ否ヤハ疑問ナリ。

進歩党ハ武新輸入機ニ多シク唐侶使(近來進歩黨ニ近ケリ)伍廷芳湯
化龍等ハ彼等ノ人助アルモ華名ヲ弄スルノミテ大事ヲ敢行スルノ勇
氣ニ乏シク且ツ愛國性ニ富ムヲ以テ遂ニハ段祺瑞等ノ龍蓋セザルヤモ測
ラレハ。

其他各黨壇説及宗社党ハ實ハ頗ル微弱ニシテ論スルノ價值無カラシ。

以上ノ依リ察スルニ北派ノ對抗し得ルモノハ極黃西派アルノミ。然レカモ相
提并スルコトヲ得ザルヲ以テ勝算無シ。

三 結 論

段祺瑞相ノ舊ミテ袁ヲ退位セシムルニ至ラバ南北ハ戦ヲ繼續スル名
義ヲ失ヒ且ツ現今南北兩軍共將卒ノ戰意無ク人民ハ平和ヲ望ミツ、ア
ルヲ以テ南北ノ妥協成立スルナラン。而シテ北派ノ大人物ヨク其團結モ亦
ハ鞏固ニシテ且ツ大妥協ヲ容許スル以上其妥協條件ハ北派ノ利アルベ
ク、總令進歩党國民黨ノ一部ハ内閣閣員ニ列シ得ルトスルモ政權ハ全
ク北派ノ掌握スル所トナラン。然レモ前述ノ如ク段ノ性格ハ平和時代ニ於
ケル内閣總理ニ適セザルヲ以テ南北統一ノ後ニ於テ漸次破綻ヲ生スルヤ
モ計リ難ク、近ク内閣會々アルベキ議會ニ於テ段が適當ノ議員ヲ擇定
シ得ルヤ否ヤ、梁士詒トテ永ク段ノ下ニ屈スル者ニ非ルヲ以テ財政上ノ
窮境ニ陷ルノ恐レアリ。黎段馮ノ三者ハ永久ニ提携スルモノトモ
思ハレザル等悲觀スベキ現象ヨク前途頗ル暗昧ナリ。

倒袁ノ目的ヲ達シタル以上共和ハ嚴正中立ヲ為シ兩國提携の及ビ
借款、利權等ノ關スル研究準備ヲ為シ置クヲ得策ト思フ。

(以上)

第1742項
第37號

大正五年五月廿七日記錄第二部接覽

對支報告

左ノ二篇ハ共ニ在湖北會友某氏ノ報告ナリ

大正五年五月二十三日 國民外交同盟會

(一) 現状ニ對スル我對支政策ニ付(五月七日稿)

最ニ五月四日稿トシテ卑見ヲ呈シ「段馮提携ニ南北ヲ統一スバク我邦北
際中立ノ態度ヲ取ルヲ要スト」線ハタルニ對シ異論百出スルコト、存シ更ニ之ヲ詳論
スルハ必要ヲ感シタルニ依リ再ビ卑見ヲ呈ス。

段祺瑞ハ天津武備學堂出身ニシテ獨逸學校ノ教育ヲ受ケ其後獨逸ニ
留學スルコト一年半ニシテ專ラ「ワグネル」ニ上殿ニ於テ兵器製造ヲ研究セリ。
是ガ爲メ獨逸陸軍ヲ崇拜シ就中其兵器ヲ尊重セリ。又前報ニ述ベレ
ガ如ク段部下ノ意見ヲ容ルノ雅量ニ乏クソ以テ其部下モ亦段ノ意思ニ投ズ
ルガ爲メ獨逸ヲ崇拜スルニ至ラン。又今面邦人ガ南派(反袁派)ニ助勢シ北
軍ヲ敵視スル傾向ヲ生スルヤモ計ラズ、果シテ然ラバ段ハ第二ノ袁ニシテ日支
提携ノ一大障害タラン。故ニ我邦ノ方ニハ袁ヲ倒スト同時ニ段ヲ倒シ兩國提
携ノ基礎ヲ固ムルヲ良トスト念ヒ、左ノ諸事由ニ依リ其實行頗ル困難ニシテ
成功ノ見込無し。

余ハ屢バ反袁ノ主動者タル進歩黨及國民黨中ノ總健派ガ相同シテ
《我邦ノ最も同情トモナラ寄セタルモノ》爲セル排袁計畫ナルモノヲ聞クニ其要者
左ノ如シ。

雲南軍ヲシテ四川ヲ徇ハ、次テ湖北ニ進出セシム。廣西軍ヲシテ湖南ヲ略シ、

次で江西に進出せし。一方馮國璋は南方に引かれ揚子江畔に侵略せし
袁の退位に迫り、其後北派と妥協して南北に統一す。北派は段祺瑞を
指すモノナリ

右計画に東意を察するに彼等が最初より自己に揚子江畔侵略南北統一
一、統一の能力に欠乏せしこと明白に馮段と妥協せしモノナリ。(現に蔡
謨は段と妥協せしトスル形跡あり)又該黨負に武断的人材欠乏し其首領
ト目せられ、唐紹儀、如きも輕薄ナル才子ナリ、而して馮段ノ聲望武力ハ
彼等ニ優レト數等ナル以テ彼等ハ馮段ヲ利用スルニ非ズ却テ馮段ヲ龍
輩セラルモノナリ。縱令彼等が今日に至りテ前計画ヲ変スルニ馮段ト戦フノ
武力及勇氣ニ欠乏スルヲ以テ勝算ナシ。彼等ニシテ馮段ト妥協スル意思
ナレバ上我々が彼等ヲ助ケテ段ヲ倒シトスルハ恰モ木ニ鞭ヲ打テ魚ヲ求メ
ルガ如シ

記し此に至りテ新聞電報に於て黃孫湯等大同團結ノ會
を以テ知り。彼等ハ何故最初より團結せりしや。邦人ハ何故彼等ヲ此に指
導セザリヤ。今や好機至リト雖も邦人有力者が多ク彼等ヲ指導
し邦人ノ為メテ犧牲ニ供シテ彼等ヲ助クルハ決心堅固ナラシカ大勢ヲ挽回ス
ルニ一線ノ望ミ無シ非ズ。然レバ種々關係上(政米ニ對スル顧慮、政府ニ反
對ニ政黨ニ對スル顧慮、或邦人民ニ對シテ疑ハント云フ杞憂、反表各
派ニ派ヲ助シバ他派ヲ嫉妬ヲ招クト云フ杞憂、又邦ノ事ハ成ルベク支那
人ノ爲メテ邦人ヲ加ヘサル主義)是レヲ政府ニ強クモ其實行ヲ期シ難ク
ナレバ邦人ハ彼等ヲ助ケテ失敗ニ導ケル我ハ支那人民ヨリ輕侮セラルニ餘
無シ

及此軍より敵視せし日又提携ヲ振作シテ破るるに至る。

馮國璋が宗社黨進歩黨を独立各省將軍段祺瑞等何れも之ヲ通じ巧みたる日見策ヲ取りつゝ見テ解會の中心ヲ握リて之ヲ之れ南派と稱し得るモノと解する者多し然るに余は明かに之を被り其性格及其部下ノ人ト爲リ知ルヲ以テ余は解會ヲ違ふ。

馮は先年貴州學堂總辦トナリ王公講習所管轄に有る事日金黨より關係上滿人ニ知友多ク以テ宗社黨ト相通信スル性ニ足る彼ト唐紹儀ト共ニ袁ノ部下トシテ多年ノ交誼アリ以テ袁ト相通信スル性ニ足ラズ。原來彼ノ性實ハ權威ニ屈從スル者トシ独立事ヲ主裁スル勇氣ニ乏乏。現今彼等革命黨ニ和テ通牒セル人物トシテ宗社黨ニ實力ヲ進出覺ニ武力弱ク知悉スルヲ以テ彼等ト提携スルハ自身及部下ノ利益ニ非スト思惟可也。又彼人ヲ客ニシテ量ニ富ムヲ以テ其執見頗る多ク其執見ハ直隸山東人ニテ宗社黨進歩黨ト提携スルヲ好マレリ。馮段兩者相不レリトハ前報告ニ述ビし如クも未だ未だ者將軍ハ段ニ服スルヲ比較的多ク前報告を照シ段ノ武力ハ馮ニ優リ馮ニ勝リ事ヲ勇氣乏シトシテ大局ノ平和ヲ以テ其主義ナリ殊ニ將ニ將ニ徐世昌及思慮周密ニシテ心術公正ニ王公珍貴カ之ヲ西事向ニ轉旋シテ之リ以テ兩者間ニ相提携シ時局ヲ收攝セトスルニトハ最早疑リ缺ク餘地無クシ。

馮段及主總立各省將軍等ノ希望ニ違フシテ三月後退任セシムルニ在リ。想フニ高麗鐵橋ト表此間ニ於テ機會ヲ求メ其地性ヲ

三 陳宦及蔡謨ノ行動

陳蔡兩者ノ行動ハ時局收斂ニ至大ノ關係ヲ及ボス可シ。陳宦ハ湖北人ニシテ當時ニ彼ノ知友多ク其真相ヲ探知スルノ便ヲ得タリ余ハ數々支那人ニ其綜合シ其要者ヲ述ベントタリ如シ

陳宦ハ湖北人ニシテ長スル大平縣人ニシテ彼ハ湖北將軍學堂出身ナルニシテ其志氣ハ頗ル高シク其行動ハ果敢ニ果進ヲモリ民國元年ヨリ四年ニ至ル間ニ袁ノ忠臣トシテ中央集權ヲ畫策セリ先年南京留守司令官トシテ袁ノ勢力ヲ削グ揚子江畔ニ北軍ニ移駐セシメ蔡元洪ヲ北京ニ招致シ中部ヲ其全部ヲ袁ノ勢力範圍ニ属セシムルハ蓋シ彼ノ畫策ニ屬リシモノ多シク然レモ袁ハ漸次彼ノ大志ヲ看破シタルヲ以テ袁乃チ其謀臣長ニ果進セシメ劉永福長ノ位置ニ止メ置キ是ニ於テ聰明モ陳ハ永ノ北京ニ留ムル危險ナルヲ察知シ且ツ袁ニ反抗スル決心ヲ固メテ四川ニ赴キ連綿ノ子ヲ爲シ當時駐紮湖北ノ陳ノ人トシテ其知友多ク陳ヲ四川將軍ニ推スルハ虎ノ野ニ放ツカ如シト云フ

陳ト蔡トノ莫逆ノ友ニシテ(民國元年以來)蔡ガ雲南ニ事リ蔡ガ爾ニ際シ預メ陳ト約シアリト云フ然レバ陳ノ周圍ニハ北軍ニ混成集團アリ其數多ク北軍四川ニ入リタル後ハ蔡ニ應スル能ハザリシカ(是ハ陳ノ知餘リヲ勇ニ示シテ爲メ)次ヲ張敬堯戰死シ北軍ノ志氣大ニ沮衰シタルニ乘リ陳ハ蔡ト握手シ袁ヲ退位セシメ南北ヲ平定セシメトシテ畫策モ其方策ノ大要ナリ如シ

現今於支那兵力主腦ハ北軍ニ在リ之ヲ擊破シテ北京城下ヲ翌
 フスハ南軍能クスル所ニ非ザルノミナバ動亂益々擴大シテ人民ノ恨
 シヲ實ニ遊ニ日本ノ關係ヲ招ク恐レアリ。故ニ今日ハ忍ビテ北軍ノ
 主腦タル段祺瑞ト握中シ而シテ袁退位及南北統一ヲ急セズ
 而シテ陳蔡共ニ新政府内ニ地位ヲ逐フズ南方ニ位置シテ潛勢
 カヲ養ヒ後日ノ計ヲシタト。蓋シ北人愚クテ以テ將來南人ニテ
 支那ヲ統治スルハ時機未ダトリ推測シタルニ據ルト云フ
 段祺瑞ハ從來ノ經歷上其名聲隆クタルモ人物(德望)非ズ大衆士トシ
 テ下シテ陳蔡ニ及ハルコト遠シ。梁士詒及陳蔡ハ支那現今ノ三
 大名人ナリ(支那人ノ觀察)且ツ二者共ニ南人ナルヲ以テ數年ノ後ニ於
 テ支那ヲ統治スベキ人物ナリト推測セラル。是レ陳蔡ハ今日忍ビ
 テ潛勢カヲ養フハ決シタル所以ナリ
 今ハ陳蔡共ニ面談無ク其人トスルハ以上ノ説ハ未ダ確カ
 信ズルニ足ラズト云ヒ茲ハ陳蔡ニ重大ノ關係ヲ有スルヲ以テ特ニ記ス

第171類
第4項
第39號

秘

報告目次

- (一) 革命ノ大勢ニ就テ 一頁
七月二日九江上陸ニ於テ 湖北會友某氏
- (二) 雲貴西廣方面視察記 二頁
七月十四日奉會ニ於テ 大伴理氏
- (三) 安南ノ概狀 十頁
全 上 全 氏

大正五年七月二十七日

國民外交同盟會

大正五年八月廿六日 記録第二部接受

報告

(一) 革命の大勢と就て

七月二日九江下流にて

湖北會文其氏

昨接其後天津、濟南、南京、上海等、煙臺にて今、楊子江湖北中、開、得、所、成、陳述候向、一、清、の、期、ハ、ハ、平、甚、

勢、全、の、僥、倖、ナリ、

段、の、約、法、議、會、等、の、問、題、を、輕、視、シ、全、力、を、盡、シ、テ、護、國、軍、の、勢、を、激、發、シ、策、を、ア、リ、將、來、議、會、開、會、の、時、ハ、議、員、の、威、嚇、を、集、メ、テ、段、に、有、利、ナ、ル、憲、法、を、制、定、ス、ル、を、望、ム、

馮、の、段、の、勢、を、隆、々、ラ、ン、ト、ス、ル、ヲ、望、ム、ハ、アル、モ、唐、紹、儀、の、各、種、秀、等、の、憎、惡、ス、ル、コ、ト、徐、王、兩、者、が、事、緒、復、進、段、而、者、向、ヲ、難、和、ス、ル、コ、ト、段、の、總、理、ス、ル、生、命、永、カ、ラ、ザ、ル、コ、ト、等、ノ、為、メ、一、時、馮、ハ、段、ト、握、手、シ、テ、南、派、の、勢、を、減、殺、シ、勉、ム、ル、ナ、ラン、

南、派、黨、及、回、民、黨、の、二、部、ハ、段、に、對、シ、怒、ヲ、呈、ス、ル、至、ル、ベ、ク、ハ、張、勳、一、人、ハ、段、に、對、シ、一、切、の、難、點、を、即、チ、南、北、の、決、裂、ト、作、ル、コ、ト、南、派、黨、に、對、シ、

我、政、府、の、力、を、テ、ハ、段、に、對、シ、倒、ス、コ、ト、期、ス、ル、に、困、難、ナ、ル、ベ、ク、亦、ハ、段、の、親、シ、ト、ス、ル、ハ、却、テ、輕、視、セ、ラ、ル、恐、レ、アリ、故、に、當、分、袖、手、傍、觀、ス、ル、ヲ、得、策、ト、思、フ、而、

セ、テ、各、黨、の、小、借、款、に、應、ジ、利、権、ヲ、我、手、に、收、メ、ル、事、ト、大、借、款、及、北、派、財、政、監、督、等、の、手、に、テ、大、財、政、家、の、北、派、の、派、遣、に、對、シ、那、財、政、の、研究、を、シ、メ、

並、ニ、事、務、ハ、目、下、の、急、務、ナ、リ、。今日、至、ル、迄、ハ、我、政、府、の、小、借、款、の、現、狀、ナ、

ル、南、派、黨、の、助、手、に、遂、ニ、右、ノ、如、キ、不、利、ナ、ル、形、勢、ヲ、現、出、ス、ル、至、レ、リ、。今、更、

ニ、之、ヲ、論、ズ、モ、益、無、ク、前途、遠、甚、。修、政、黨、業、ス、ル、ヲ、好、シ、ト、ス、。免、

レ、南、我、が、官、民、の、情、向、一、致、ヲ、得、ル、。勿、々、

(三) 雲貴兩廣方面視察終

七月十四日於本會

大伴理氏

余が雲南に着シタルハ四月四日ニシテ事ヲ革命軍内ノ實情ニ就テ視察スル所アリ、五月十九日出立、帰途廣東省聲援ニ依リテ軍務院ヲ訪ヒ一通商滞在ノ上岑春煊及ヒ其幕僚等ト會ニテ相談スル所アリ。夫レヨリ香港ヲ經テ先月旬旬歸朝シタリ。

今中華革命軍ノ起ルハ幾多ノ軍閥アルベシト云々氏雲貴起兵ノ直接動機ハ馮國璋ノ煽動ニ在リ。初メ袁世凱が帝制運動ヲ進行シ天下舉テ之ニ反對ノ氣勢ヲ呈スルマデ馮ハ其知レル雲南ノ少壯士官等ハ電報ヲ發シテ起兵ヲ倡導シテ曰ク公等一々以テ起タバ我々之ニ應ジテ援助ヲ辞セズ。長江一帯ノ如キ、我同志ノ手ニ歸スル易易タルアラズヤ。此際唯が斯ノ一字アルノミト。蓋シ馮ハ此機會ニ乘ジテ其野心ヲ遂ゲントスルニ出テタルヤ論ナシ。而シテ其電報ヲ得タル雲南少壯士官等ハ大ニ喜ビ黃毓成日本士官學校劉雲峰、羅佩金日本士官學校楊榮其他三名主トリテ運動シタル結果、唐繼堯ヲ抑シ立テ將ニ其行動ヲ開始セントスルトキ恰モ蔡鈞ノ來ルニ會シ、相俟リテ其勳ヲ見ルニ至レリ。又ハ此雲南軍ト馮國璋トノ間ニハ藉口實タル者馮ト從來惡意ナル關係ニヨリ專ラ彼ヲ斡旋ノ方、任シ今尚ホ兩者間ノ懸隔ヲ取リ居レリ。

馮ニ就テハ種々ノ説アリ。或ハ北方黨ト云ヒ、或ハ北方六分革命軍四分ノ臭味ト云ヒ、或ハ宗社黨、或ハ革命黨ト云フ。然レ凡彼が内心ヲ解剖スレバ彼ハ決シテ北方黨ニモ、宗社黨ニモ、革命黨ニモアラズ。唯其自己ノ野心ヲ遂行セシガ爲メ各々其據スル所ニ向ッテ黨同ヲ裝ヒ勢力ヲ利用セントスルニ過ギザルノミ。

即チ馮が雲南軍ヲ煽動シタル本意ハ實ニ此モナク雲南軍ノ動

蔡はヨリテ天下ノ風雲ヲ打起シ、自分ハ其間ニ衆ニテ辣チテ振テ雲南ヲ自
己ノ手中ニ煙メテ自ラ大總統ノ地位ニ上ラントスルニ在リシナリ。而シテ雲南ハ起
兵ト共ニ其勢力ヲ推ガ豫期ノ如ク天下ヲ風動スルニ至リシニ拘ラズ、馮ガ之ニ應
ズル能ハズ直後トナリタル所以ノモノハ、會々馮ガ雲南ニ向ッテ發シタル電報
表、チニ入り表ハ極力馮ヲ警戒スルニ至リタル為メナリト云フ。馮ト雲南軍ト
ハ此關係トナリ居レルが故ニ馮ハ他ノ方面ヨリハ北方派ノ如ク見ラレ
居ルニ拘ラズ雲南ニテハ龍ク迄之ヲ善意ニ解シ馮ハ他日必ラ南方派ノ
為メ其力ヲ致スモノナリト信ジ居レリ。

蔡鏐ノ雲南ニ入ルヤ其初メ唐繼堯ト折衝宣シカラズ、蔡ハ自ラ雲
南ニ留マリテ其實權ヲ握リ、唐ヲシテ出征ノ任ニ膺ラシメントヲ策セ
シガ、唐派ハ早クモ之ヲ看破シ蔡ヲ刺サントシタルモノアリシモ、蔡ガ勢力ノ已
ニ利ナラザリヲ覺リ萬事ヲ唐ニ譲リテ出征シタル爲メ事無クシテ止
マリトノ導アリ。先頃唐蔡未だ釣等ノ間ニ不和ヲ傳ヘラレシハ或ハ此事
ノ誤傳ナラン。然レモ今日ニテハ何レモ圓滿トナリ居レリ。

蔡鏐ハ此メ雲南軍ヲ以テ勇猛天下ヲ横行スルニ足ンモノト自信重シ
ガ一旦其軍ヲ率ヤテ四川ニ入ルヤ北兵頗ル増援ヲ得テ殆ト三倍ノ優勢
ヲ占メ衆寡懸絶シテ惡戰ヲ開ク爲メ事全ク豫期ニ反シ、之ニ加フルニ
余ガ雲南ニ入りタル四月下旬ニ於テハ納溪ノ奮戰其功ヲ奏シタルモ死
傷約四百ニ達シ其戰鬥力モ亦大減シタルニ至リヨリ。然ルニ此時幸ニ
テ陳宦ヨリ休戦ノ提議アリタルニヨリ、蔡ハ喜ビテ之ニ應ジ、又一方各省
ノ響應ヨリテ此ニ漸ク其地歩ヲ保持シ以テ今日ニ至ルヲ得タリ。但
シ此間ニ於ケル而軍ノ狀況ハ恰モ第一革命ノ際ニ於ケル武漢ノ對陣ノ
酷似セルモノアリ。陳宦ハ恰モ漢陽ノ北軍ノ如ク蔡鏐ハ武昌ノ黎元洪ニ
似タリ。當時北軍ニシテ南軍ヲ粉碎スルノ志アラシカ、兵力ノ優勢アル
蔡鏐ハ到底北軍ヲ之ニ得ザリシヤモ未知ン可カラズ。然ルニ北軍ガ

敢テ決戦ノ方針ニ出テ却テ停戦ノ態度ヲ取ルに至リタル所以ノモノハ蓋シ
袁世凱が第一革命ノ際ニ於ケル南北協約ノ手段ヲ用テ陳宦ヲ利用シテ
蔡鈞ヲ懐柔シ更ニ其手ニヨリテ雲貴ヲ懐柔セントシタルモノニシテ尤モ
其内情ハ深キ魂膽アリシコト殆ド疑フヘカズ。

陳宦が北派ノ將軍トシテ四川ニ駐マルヤ、最初ヨリ其態度頗ル暖
昧ヲ極メタルモノアリシが遂ニ袁ニ利用セラレテ其結果蔡鈞トノ間ニ休
戰約成立セシモ之ト同時ニ蔡鈞ノ態度モ亦ク甚ク怪シク殊ニ對
日態度ニ於テ驚コシ其形跡ヲ認ムルに至リタリキ。

又ヨリ先キ大局ノ關係スル各方面ヨリノ状況ハ悉ク雲南都督府ノ手
ヨリ報告ヲ受ケツアリシが停戰約成立ノ頃ヨリハ各種ノ情報都府
蔡鈞ヨリ雲南軍ニ傳達シタルノ奇現象ヲ呈シタリ、殊ニ當時支那侵略
ノ目的トスト稱セラレタル日露同盟成立說若クハ福建方面ニ於テ日本艦
隊活動シ多數ノ日人上陸シテ福建略取ヲ開始セリ等ノ偽ニ電報ノ如キハ
蔡鈞ヨリ雲南都督ニ轉電シ来リタルモノナリキ。蓋シ蔡鈞が停戰
約成立ノ前後ヨリ著シク軟化シ其對日本態度ニ少ナカラザルモ其文化
未ダ至リタル原因ハ實ニ此等偽電報ノ爲メニ歟ナカザルモノナリキ
ニ居ルトモフ。

當時此偽電報ノ蔡鈞ヨリ雲南都督ニ来ルヤ、雲南都督府ハ一般
厚ク日本ヲ信ズル際ナリシモ一旦ハ且ツ驚キ且ツ怪シ之ヲ〇〇駐在
ノ總領大佐、〇〇少佐等ニ質シタルニ高氏ハ其ノ日日本ノ支那ニ對
シテ一直ニ野心ヲキハ今更ヤルノ必要ナシ。今若シ此ノ如キ偽電
報ヲ信ズルが如キアラバ彼等ハ即時此地ヲ去ランノミト答ヘシガ都
督以下皆之ヲ信ズル有様ナリキ。之ト同時ニ雲南都督ヨリ直ニ蔡鈞
ニ對シテ其証書ヲ送リテ說明シ送りタルが故ニ蔡ノ態度モ亦ク漸次変アル
ニ至リ。

蔡錫ハ斯ノ如ク一時表世凱ニ致サレ、五六分通りハ遊力ニ其術中ニ陥リ居
タルモノミテ當時雲南軍ニ對スル態度モ頗ル曖昧ヲ致シ或ハ其向背ヲ疑
ハシムルモノアリシモ今日ミテハ四方ノ形勢モ變化ミタルヨリ強チ前日ノ如
キ疑團ハ氷解シタルモノノ如シ。

最近雲南代表者ノ東京ニ來リタル者ニ就テ聞ク、其後劉蔡錫ハ雲
南軍トノ間ニ漸ク一致シ、李烈鈞及ヒ唐繼堯トノ間ニ亦々何等扞格凡
ヲ見ズ。要スルニ兩廣（龍濟光ヲ除ク）雲貴間ハ今ヤ意外ニ鞏固ナル團
結ヲ爲シ、而シテ兩廣ニ於ケル岑春煊ノ軍ハ大部分雲南軍ニ支配セラレ
岑モ雲南ニ對シテ降意ナク萬事ヲ相談シ、其聲望ハ寧ろ岑ニ集マリ
テ事實上岑ヲ中心トシテ統一ノ歩ヲ進メツアリ。

岑ハ其行動公明正大ニテ夫ノ機密アルニ母、独リ專ラ自家ノ権勢ヲ
張ラントスル輩ノ如キトハ自ラ其誤ヲ覺ス。是レ衆人ノ岑ニ推服シ其
軍務院副院長ノ地位ニ拘ラズ、實權ヲ專ラ之ニ歸セシムル所以ナリ。

初メ軍務院ノ組織セラル、ヤ、岑ハ唐繼堯ヲ其院長ニ推シ、唐
辭シテ受ケズ。岑ハ更ニ李根源、梁啟超等ニ内命シテ、唐ヲ推ス、
決シテ此大任ヲ受ケ、唐ハ諾シテ受ケ、唐ハ僅ニ之ヲ受ケン
。唐ハ岑ノ院長トナリ、岑ハ副院長トナル。唐ノ院長ニ就キ、唐
白ノ、唐辭シタルヲ得、岑ハ之ヲ受ケ、唐ハ院長トナル。岑ハ唐
カント。是レ唐が就任條件ナリ。蓋シ唐繼堯ハ實ニ雲南起軍ノ首
功ナルヨリ岑ノ之ヲ推ス所以ナリト云凡 全体ノ聲望實ハ岑ノ之
ニ伴ハザルモノアリ。之ニ及ビ岑ハ聲望ノ他ニ救ニアルモノナラズ陸榮廷
ハ服シテ其機軸タルニ甘ンル蘭ニ在リ。李烈鈞ハ勇氣ノ男子ニシテ
岑ニ傾倒スル所アリ。唐繼堯モ岑ヲバ安心出来ルトテ之ニ推服シ蔡
錫モ亦々之ニシテ之ニ聽キツ、アリ。岑ハ實ニ事實上ノ軍務院
長タルナリ。

梁啓超ハ嘗テ北京ニ在ル際、帝政反對ヲ唱ヒ其後併領海防ヲ
通過シテ廣西ニ入リ、廣東狂立ニ関シテ相當ノ奔走ヲ致セルノミナラズ雲
貴兩廣ノ間ニ其門弟子甚多ト即チ唐繼堯ノ如キモ其一人ナリモ以テ
其獎勵努力ハ大ニ革命ノ進行ヲ誘フニメ、頗ル革命軍ノオトスル所ト
ナル。然ルニ軍務院組織ノ後借款ノ為メ彼ノ上海ニ來ルヤ漸ク野心ヲ起
シ功ニ設機端ト握チシニ總理ト為リテ内閣ヲ組織シ軍務院ヲ擯置
シテ其意ノ如クナラシメント欲シ暗ニ劃策スル所アリシガ同志ノ觀望スル
所トあり其排斥ヲ蒙リテ行ハレズ、今ヤ軍務院ノ後援ヲ失ヒタル彼ハ南北
兩方ヨリ容レラズ此蜂取ラスノ境遇ニ在リ。其前途知ルベキ耳。

孫黃派ハ今モ尚ホ岑ト相當ノ聯絡ヲ保チ互ニ遠ク相談シツ、アレ
氏未輩等ノ間ニ著シキ軋轉アリ上下一致シテ提議スルコト至難ナラ
ン。殊ニ孫派中ノ戴天仇ノ如キハ南方軍人間ニ評判甚々宜シカラズ尾
正モ軍務院ト妥協ヲ希望シツアリトノ事ナルモ是レ亦大同様ニシテ
恐ラリハ一致實現ナカラシ。

又々岑ハ龍濟光ノ討伐ヲ敢行セザルガ爲メ、局外ヨリ無勢カナルカノ
カリ見ラレツ、アレ氏畢竟決シテ然ラズ。元來龍ハ廣東不和ノ根源ニシテ唐
繼堯ハ陸榮廷等ヲ始メ一般ノ革命ハ極力之ニ反對シ若シ其討伐ヲ希
ハザルナキ有様ニシテ一時陸ノ如キハ梧州ニ在リテ將ニ之ヲ討タレトシ
ル、岑ハ極力斡旋ノ旁ヲ取り僅カニ事無カラシムルヲ得タリキ。蓋シ岑
ガ此態度ニ出デツ、アルヲ見テ局外者ハ其無力ニ依ルト為ス次第アレ氏
岑ハ最初ノ比較的安カナカリシ時代ト雖氏龍ヲ討伐スル位ノ實力
ハ之ヲ備ヘザル、アラザリシモ斯ノ多數者ノ反對ヲ排シ專念彌縫ヲ
事トシタル所以ノモノハ決シテ其無カナルガ爲メアラズ、唯ム彼ガ廣東ヲ愛
スルノ念濃シリ之ヲ安んズルニ化スルニ思ヒズ世事ニ先除ケンコトヲ希
ヒタルガ爲メ、外ナラザリシナリ。此間ニ此スル岑ガ苦心ハ誠ニ一方ナラザ

ルアリ。廣東ノ民心モ漸ク寧ム。心事ヲ解スルに至リシモ其後龍ハ義ノ
犯後、於テ更ニ幾項ノ難ヲ取リ以テ廣東ニ於ケル勢力ノ回復ヲ計ル
トスル態度ニ出デタルヨリ、岑モ止ムを得ズ強硬ナル態度ニ出デテ龍
ノ退去ヲ迫ルに至リタルモノナリ。

軍事ハ龍所先問題解決ト同時ニ雲貴兩廣四川共ニ完全ニ其勢力範
圍ニ滲スベキナリ。各路ノ軍勢ハ相率テ共ニ湖南ニ出ツベク、今や湖南
ニハ初メ陸榮廷ノ入来ヲ待テ居リ。江西ハ李烈鈞駐マリテ永南湘ニ據
セシト袁氏一般人民及ビ軍隊間ニテハ其意ヲ入レテ變望シ以テ
南方ノ勢力ハ江南形勝ノ諸省ヲ連テ其統一ヲ期シテ居ル以上ハ
軍隊間ハ自然北方ト對抗シテ龍ノ退去主張ノ貫徹ヲ期シ假借スル所ナ
カルベシ、而シテ北方ノ統帥タル段モ亦自負心強キ者ナルカ故ニ次ニテ之ニ屈
服セズ龍ノ勢力ハ龍ノ解決ニ出デントスルハ數ノ免レサル所ノモノナリ。

今や南方ノ諸軍ハ此底力ハ決戦ノ決意ヲ以テ先ニ我軍ニ進出スルヲ
目的トシテ極力準備中ニ在リ。其行動力カスレテ事實ニ顯ハレ来ル。

南北兩軍ハ湖北ニ於テ對抗ノ場合ニハ馮國璋ハ恐ラシク中ニ立テテ張
勳亦北軍ノ為メ戦ハズ結局南軍ハ雲貴兩廣ノ各軍聯合シテ之ニ對
リ北方ノ援助ヲ求ムルニ決シテ居リ。引揚シ来ルニ當リ張勳等ノ軍ニ對シ
テ其勝敗ノ結果ハ引テ南北ノ妥協ヲ決スルに至ルベシ。我國ハ
之ニ對シテ東レテ如何ノ方針ニ出ツベキカ、大ニ考慮ヲ要スベシ。

余カ軍務院ヲ訪フヤ唐健堯ノ使者トシテ推キ爲メ、滯在連日
向軍務院ニ在リテ延攬ニ興リ、又ハ岑春煊トハ腹食ヲ共ニシタリシガ孰
ヲ善ノ動作ヲ見ルモ其詞ヲ持テん實意ニシテ恬淡邊幅ヲ飭ラズ其
情ニ據ルニ敢テ辭令ヲ費セズ其意ヲ食メ同ノシ、公平至誠
唯其其心ハナルヲ覺ルニ足ル。如シ。政勢ニ望リテハ院內幕僚ノ推選ニ
至セ、敢テ自説ヲ固執シコトテ其誠ニ真意ニ信服セザル者ナシ。

蓋し其人物動作表世凱トハ正反對ト云フ可シ。

余カ軍務院ヲ辞志セントスルヤ、岑會ニ謂テ曰ク、日、我國革命事業ノ今
日迄ニ進行シタルハ實ニ日本ノ功蔭ニシテ感謝ノ辞ナシ。今後我國ハ益
々日本ノ援助ヲ要シ又々自分等ノ力ノミテハ到底統一ノ大業ヲ遂ゲ得
ズルヤ、余カ答ヘリ、事ハ日本ノ助力ニヨリ又邦ヲシテ革新ノ大業ヲ成就シテ
西、東ノ諸生ヲ救ヒ茲ク日本ニ信頼シテ東洋平和ノ趣旨ニ副ハントウ得
セシムバ、余カ之ヲ恨ミナシ。願フハ貴下ノ帰國ニ際シ南方ガ日本ニ傾倒セル
狀ヲ時ニ其下ニ傳ヘラレトコトナシト。以テ其心事ヲ窺フニ足ル。

表世凱去、余カ報アルヤ、余等ニ聲援ニ在リ。軍務院内外ハ於ケル又邦
人ノ意向ヲ見ルニ、彼等ハ最初ハ誠ニ其標的ヲ失ヒ、當惑ノ氣ナリシモ暫
時ニシテ強辯ハ、表ノ死ガ今日ノ向題ニアラズ。蓋ハ其政黨餘孽ヲ
一掃シテ後始メテ真ノ政治改革ヲ議スルヲ得ベシ、今後ハ即チ食ノ進
退ノ餘議ヲ減テ期ス可シ。夫レ迄ハ一、武力ノ解決ニ俟タザル可カラズ
トノ決心ハ一數モヨリ。蓋シ表モ亦其考テト云フ迄モナシ。而シテ之
レカテ故トシテハ表面ハ強健ナル態度ヲ以テ所衛スルモ主眼ハ實ニ進取
強ナル意ヲ取リテ曲ケズ。即チ進歩ハ誠ニ其標的ナリ。現在日本ニテ
ハ姑息ナル策ニ安カクシテ居ル者アルカ、如シト云ハ余カ其所以テスレバ
會リ和衷ニシテ又邦ノ現状ハ決シテ南北ニ安カク成立スルモノニアラズ。今後
益々南北對立ノ狀勢ヲ顯著ニシテ武力的衝突ノ時代ニ入ルベキヲ信ス。南
北兩派ガ武力的大衝突以後、於テ又邦ハ容易ニ其一方ヨリモノカニヨリテ
全國統一ノ目的ヲ達セラレ得ベキヤ否ヤ、而シテ又々如何ナル政体ノ下ニ
統一セラルベキモノナリヤ否ヤ是レ疑ハ難向ナリト岑氏余カ南方側ノ政体
ニ主眼アル意向ヲ酌ムニ、然然然其共和式邦統治ノ政体ニ適宜ナルモ
ノハ認ムル所ナズ。余カ如キ強端ナル共和政体ハ特ニ適セズ。然レトモ

一、其和ヲ主張シテ君主制ヲ解キイル今日ニ於テ之ヲ復元スルハ各閣上
リスルモ其難キ所ナカレバ故ニ各ハ其和ヲ存シ其實君主主義ニ近キ制
ヲ取ルヲ理想ノ政体トスルニ在ルモノ也。是レ亦又其新憲法上重
ク注意點ナリト信ス。

因ニ帝方ニ於テ其對日感情頗ル良好ナリ。是レ實帝軍以來日本
南方派ニ對テカザル同情ヲ寄セタルモノナリ。日本ノ方針ニシテハ
然ラズハ彼等ハ其原意ニ感ズ能ハズ。日本ハ依然其舊態ニ至ルベシ。
又々姑ク其注意點ニ一事アリ。支那人ノ排日ニ對スル感情是レ
リ。排日人ハ其排日感情前ニ於テ其排日人等ノ支那人ノ排日感情ニ特
殊ノ關係ヲ以テ之ニ接觸スルモノナリ。今日本ノ排日感情ニ對テハ其
ハミナルトノ為メ支那人前ニ於テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ
獨逸が排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
ルモノナリ。是レナラズ、却ツテ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
モノ排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
カハノ日ハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情

△ 昨 日
ハ、大作家氏ヲ訪フヲ之ヲ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
解フヲ以テ之ヲ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情

(9)
軍勢既微衰、就テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
果シバ、目下在テ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
ルモ各方面ハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
其原因ハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情ニ對テハ其排日感情
此間何事ヲ待ミ日本當局ノ意ニ此レ軍勢既微衰、領袖ヲ其排日感情ニ對テハ其排日感情

等ヲシテ輕信セシメタル結果止ムヲ得ント爲レテ此に至リタルアラハ
ヤトモ精測セラル。

軍務院廢棄ハ參奏壇其他南方派ノ目的ヲ貫徹セシムル上ニ於テ頗ル
不利益ヲ招キタルモノシテ是レ決シテ南方諸領袖ノ本意ニアラザルヲ論じ
軍務院ハ假令此ノ如キ事情ニヨリテ撤廢シタリト雖モ其廢棄ハ軍
面ノ名優ノミト止リ、事實ハ依然舊本體ヲ存シ能ク近初志ノ貫徹
ヲ期セントスルニ在ルコト前日余が述べタル方針ト異ナラサルモノアリ。其大
局ニ於テモ決シテ南北ノ融和ヲ見ハザルベキハ余ノ信ニテ疑ハサル所ナリ。
此際ニ於テ最も注意スベキハ日本ノ態度ナリ。彼等ハ最初ヨリ日本ノ後
援ヲ唯一ノ頼トシテ行動シツ、アリシガ、頃來日本ノ態度稍ヤ異日ノ
如クナラザルニ對シ、輔ヤ悲觀シ來リ、假令日本が昔日ノ如ク具體的
援助ヲ與フン能ハストスルモ却テ其同情ホケテモ維持セザルニシト
ハ彼等が常ニ余等ニ向ツテ寄セ來リツ、アル希望ナリ。即チ日本ノ向北背ハ
直チニ著イテ彼等が意氣勢力ノ消長ハ重大ナル關係ヲ及ボスモノアリ
使ッテ今茲ニ日本ニシテ彼等ヲ如何ナル方針、下ニ屈從セシムルカ如
クシタラバ、極リ彼等注カサル意氣ヲ喪失シ、解セシムルノミナラズ
彼等ノ精神ハ何レノ時ニ至ルモ其意氣ハ衰へ、其方針ハ迷フ、其結果
如何ナルハ其時ニ至ルモ其意氣ハ衰へ、其方針ハ迷フ、其結果
如何ナルハ其時ニ至ルモ其意氣ハ衰へ、其方針ハ迷フ、其結果

(三) 安南ノ概狀

全上席上ニテ 全氏

(10)
余ハ雲南ニ出入ノ途次佛領亞南ヲ通過シ、少田地ノ事
情ヲモ見聞スル所アリタルニヨリ左ニ其概狀ヲ述ベ。
亞南ハ佛國政廳ヨリ徵收セラル、租税ハ人頭税ノミニテモ一人一
年、廿戰前ノハ平均約十兩五兩ニ至リシガ、開戦以來ハ更に約十六

七國に増加せり。人類戦以外に相殺つるも合算すれば果して幾何に達する
 か決して少くはあらざるべし。
 東南人が素心流す如く境遷り斯くも如く重負を課せしむるハ
 實に佛國政府と多額ノ膏血ヲ貢納せざるを得ず。此等ノ生れ来りタ
 ル權柱トモ見ルを得べし。又ハ彼等ハ佛國宮室珠玉佛具ヨリ有ラユルハ
 暴ヲ發シテアルト云語回斷ナルモノアリ。例ハ前記ノ東南人中一箇ノ英人
 アリ佛國ノ派ムル所トナリシカ、其處ニ於テ素心流トテ向ハズ佛具ハ忽
 チ莫意ニ押テ奪テ来リテ其負振ヲ強テ帶在シテ出テ歸レバ。然カモ
 其夫若クハ父兄タルモノ之ヲ如何トモスル能ハサル如キハ公然行ハレツ、ア
 事實ナリ。其他佛人等が東南人ニ對スル一般待遇觀リノ慘酷冷僻ナル全更
 まつてモナシ。お人ノ狀貌ヲ見ルに何レモ一種言フ可カラサル特殊ノ暗愁事目
 ノ間、總シテハ彼等が此苦向、翻弄セラル、結果ニ外ナラザルヲ、
 人ヲモテ豎ニ憫憐ノ情ヲ堪ヘザラシムルモノアリ。
 東南人ハ朝鮮人ニ似テ日本人ヨリモ少ク、衣服モ稍ヤ朝鮮服ニ似
 タリ。教育ハ極低廉ノ寺小學校ノ小學校アルノ過ギズ。政府ハ政策上ヨリ
 其等教育ノ善及ヲ好ムヤルカ如シ。但ハ其等ト稱セラル、言アレバ又其
 二國ノ間に在リテハ其等ノ教育ハ佛國ノ教育ニ劣リト云フ。新開ハ其等ノ教育
 新開アルハ其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。
 然レモ此等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。
 フリハ。其等ハ其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。
 生計ハ極ニ低廉ニシテ其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。
 ト稱スル者ト雖モ其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。其等ノ教育ハ其等ノ教育ニ劣リト云フ。
 東南人ノ心中ハ一般ニ華金ヲ思ヒ日本ニ類ラントテ希ミツ、アリ。
 唯ハ佛國ノ耳目ヲ怖レテ之ヲ口ニスルヲ憚ルノミ。華金党ハ未必
 具體的ニ團結ヲ見スト雖モ少數教育者中ニハ其等ノ廣西ノ陸榮廷

等と聯絡し取りつゝアリシ者アリ。無事辭に於てハ仲間士官三名が出入り政治の意味ノ下ニ爆彈ニテ殺サレタルアリ。又本年五月十日、安南王ハ支那皇帝受下聯絡シテ其面儀ヲ企テシモ著覺獄ニ投ケラレシアリ。今其叔父異代テ王ナリ。

佛國ハ皇帝ノ鐵道警備ニハ佛兵約三大隊、他ハ若ク土人兵ヲ用ニ、鐵道以外ノ警備ハ極メテ薄シ。今更ニ歐洲戰ハレ、當リ土人兵約三萬ヲ出兵セリ。此が途中戕害列ニハ罹リテ被害レタル者事ハミ出ナカリト傳ヘラル。

密索人ハ其境遇及ビ革命ヲ思フノ心ハ前述ノ如キモノナリ。唯ハ積年
 ノ壓迫ト組織ノ微氣ミ迫ハレツ、アルガメ其氣力消耗シ且ツ佛人ヲ以テ純
 對優勝ノ人種ト妄信シ居レルガメ未ダ著シキ革命的心火ノ燃焼ヲ見
 ズト雖モ夫ノ歐洲ノ派遣ノ士人兵等戰場ニ於テ佛兵ノ實力ヲ見ん
 者戰後帰國ニタリ曉ニ於テハ恐ラシ一騷動ヲ免レザル可シ。

武帝ハ日本入ノ在留スル者多カラズト爲テ横山並修成ノ如キ八十年の
 前ヨリ彼地ニ在リテ頗ル信用ヲ播キ、佛人及心出人等ヨリ殆ト領事以テ
 尊敬ヲ拂ハレ居レリ。故ハ如メ佛人ト共同ニテ農園ヲ經營シ、事ニ二三白人
 ノ心民ヲ役使シ、専ラ米作ニ從ヒタリシガ、今ハ軍務ニ之ヲ當リ、尤モ其事
 業ヲ擴張シテ、今ヨリ一ノ新所及ビ陷番ノ表共ニ從事ス。

(12) 要ト云リ何シモ異國大ニ鑛質良好ニシテ將來頗ル有望ノモノナリト云

以上

大正五年正月一日

國民外交同盟會